

# ☆記念誌に寄せて～役員のパージ

## も く じ

県協会理事長の思い出		
——郡山女子高校時代——	宇賀神喜嗣（顧問）	99
卓球とのかかわりの中で	佐藤 昭典（顧問）	102
大会の思い出	土屋 弘（顧問）	102
「第50回ふくしま国体審判員」を育てて	壁谷 之夫（顧問）	103
卓球こそわが人生	松崎 俊一（顧問）	106
南東北弱小三県	深谷 秀三（副会長）	108
「回想」	伊東 守信（顧問）	109
卓球との出会いと旅路	平石 家治（副会長）	109
「回想」	野木 孝夫（会長指名理事）	110
卓球を通して	菊地 敏美（県教職員理事長）	111
協力会員としての思い出	渡部 信行（監事）	112
私の人生と卓球との出会い	宗像 次男（県中支部長）	113
うつくしまふくしま大会	伊藤 秀行（理事長）	114
国体監督の思い出	渡部 洋一（前理事）	115
私の卓球の思い出	伊藤恵美子（前副理事長）	115
出会い・感動・挑戦・歓び・挫折・感謝	西郷 徹夫（会長）	116
あの頃の思い出	二木 康視（副会長）	124
回想・雑感（60余年）	三浦 勝美（名誉会長）	125

# 県協会理事長の思い出

## ～郡山女子高校時代～

福島県卓球協会元理事長 宇賀神 喜 嗣

昭和31年1月、猪苗代高校から郡山女子高校に転勤、そして卓球の顧問になる。

県中地区の顧問会議のとき郡山商業高校の本田克彦先生から高体連卓球部の県中地区委員長は郡女からと云われ何の考えもなく引き受けた。

直後の高体連の理事会の時、県中地区委員長が県の委員長になってくれと要請される。猪高時代の顧問歴が2年だけで卓球の事など分からない者に勤まる訳がないので固辞する。然し高体連理事の郡女の横田源助先生が脇から私も手伝うからと云われるので仕方なく引き受ける。

高体連の県大会は迫って来る。申し送りも何も無い。三浦勝美先生が心配して笹山先生と一緒に県卓球連盟理事の志賀一さん宅に行くからと云う連絡を受けて私も志賀一さん宅に行く。初対面の挨拶のあと三浦先生から申し送りを受ける。このあとは、宇賀神のいるところ三浦ありで、絶えず教示を受け支援されて私は大役を果たして行く。

地区委員長は、県北 斎藤正雄、県中 本田克彦、県南 和知一、会津 武山 博、相双 松崎義次、磐城 富樫和雄、でこの方々にばかり各地区より500円ずつ支出してもらい3000円で高体連卓球部の運営をする。県からの交付金のあることはこの後わかる。

この年であったと思う。東北高校卓球選手権大会の掃路ニツタクの向原一雄専務が訪ねて来た。

要件は来年の東北高校卓球選手権大会の試合球の事についてであった。話を聞いただけで別れた。

郡商の本田先生の紹介でYSPの鎌田光隆さんに郡女の卓球のコーチをお願いした年でもある。

東北高校卓球選手権大会の当番県が廻ってきた。

東北5県の委員長さんに試合球を従来のニツタク一球にYSPを加えたいと希望を述べ相談したところ、ニツタクのみが3県、YSPを入れてもよいが2県、そこで当番県と云う事で2球にして大会要項を作成した。虫のいい話だが、まずニツタクに行き資金援助のお願いをする。専務さんの返事はワイエスと同じにと云う事であった。次にワイエスに行き事情を話す。ニツタクと同じにと云う返事を貰う。この時は長女をつれての旅。ニツタクの社長さんは帰り際にわざわざ広小路のデパートまで送ってくれて娘に土産を下さった。誰にでも出来ることではない。人間が違うと思った。このような訳で試合球を2球にした為に収入は半減した。

昭和33年、平での県大会のとき、会津女子高校には勝てないが決勝まで行く積もりだった。それが松崎さんの浪江高校に一回戦か二回戦で破れる。

シェークハンドのカットが2人いてこのカットに勝てなかった。(今泉英子は県体の時は運よく勝って、会女の平野幸子、もう一人は若女だったか福光町会場の富山国体に参加)

シェークハンドのカットの選手を作ることが私に課せられた。橋本トシ子(1年)平原千賀子(2年)が協力してくれた。今から考えるとなんでも無い事だがカットの教え方が分からずニツタクに席を置いた早稲田大学の野村莞先生にまず私が習いそれを橋本に伝えた。勿論橋本も野村先生から直に教わったが私の方が余計先生に接する機会が多かった。期間が短く平原には教えられなかった。この年の前後、秋田の田村悦郎先生が病気になり、宮城の庄司秀一先生のお世話で後任として全国高体連卓球部の監事になる。松山市道後町の仙波光先生の薫陶を受け、又柳井の中村清二先生に秘かに近づき先生の卓球指導を盗み聞きしたくて一緒に風呂に入ったのも監事になれたからで、御陰で庄司先生とはこの後も長い付き合いをさせていただく。

今泉英子たち4人が卒業した年、郡女は弱体化した。弱くはなりたくないとしみじみ思った。それは地区予選の組合せを作るときに現われた。郡女と戦っても負けないと云う気がありありとしていた。今泉たちを育てる時の指導方法が悪かった。女は男と違う。それが分かったような気がした。

この時まで地区委員長の仕事もしていたが、次年度にはやめる。生徒に対しては1年、2年、3年も同じように接することにした。ある学年だけを偏重しない。この事の大切さが分かった。生徒の方

にも変化が現れ練習場の雑巾がけを云わなくともやるようになった。

昭和35年には橋本トシ子が岡山市のインターハイに行き、昭和37年には五十嵐京子（中学ではバレー）が鹿児島市のインターハイに、そして昭和38年には吉田マサ子が浪江町の県大会に優勝する。橋本・五十嵐・吉田とシェークのカットが続いて全国大会に出場出来たのはカットに負けた口惜しさの御陰である。吉田まさは中学の時は水泳。昭和38年度は、吉田マサ子、古川豊子、野呂敏子、上杉八重子、遠藤久美子、佐々木恒子、菅野秀子、佐藤留美枝と8人いた時で郡女は強かったが福島女子高校、磐城女子高校も強かった。

福女が「郡女なんかには負けない」と云っていると云う事が私の耳に入って来た。郡女に負けたくないと言うのなら分かる。『なんかに負けない』と云われた事にカチンと来た。他に負けても（これは良くなかった）福女には絶対負けるなど云う事になった。オーダーを前夜選手と一緒に真剣に考えた。ショート主戦の遠藤を一番にして高倉（カット）に当てる作戦、これが適中し遠藤はストレートに勝った。ここが圧巻。この晩は小野哲男コーチ以下泣いたと聞く。

前年度は会津だったと思う。郡女は磐女に勝って帰りの列車の中で安田先生に色々良い気分で話しかけた。安田先生の口惜しさに気付いたとして良い気分が先行していたらしい。後になって安田先生と話し合った事を復元しながら書いている。

浪江の県大会の前に小野町で磐女と練習試合をやっている。お互いの技術を高めるために悪いことではないが、この時期に行ったこと、相手を十分に観察しなかった事が孫子を3回も読んだのにと云う事になる。安田先生には卓球の技術指導は出来ないと思っていた。卓球技術の指導はしなくとも練習の監督は出来る。安田先生は、怠けているか本気か、それだけを見極めて、朝授業前に、2校時終わりに食事させ昼休みに練習、そして放課後と徹底させた。私も鬼と云われると聞いた事があるが、安田先生は私以上の鬼だったと思う。

この鬼に佐藤昭典さんが技術指導に当たった。鬼に金棒である。

京都の全国大会には、学校対抗とダブルスが磐女、シングルスが郡女2、福女2、国体は山口県の柳井市で磐女は斎藤恵美子、磯上佳津、郡女は古川豊子、野呂敏子が行く。

安田先生と一緒にだったので帰路の観光も楽しかった。

昭和39年度は決戦で福女に負ける。この時はラストまでゆき木ベラの高橋に須賀が対戦して負ける。木ベラ対策は講じていたのだが私の木ベラではどうしようもなかった。卓球用具の発達の面から考えて見て木ベラは時代遅れであるが、それが通用したのは相手が不慣れであるからで、慣れられては勝てない。

コーチの小野さんは入院中だったが練習時間がくると病院を抜け出して練習を見たと言っている。これに負けたと私は思っている。磐女のときも福女のときも負けるべくして負けたと思っている。

全国大会は三重県伊勢市で、学校対抗、ダブルス、シングルス3が福女で、郡女は三瓶利子（優勝）ダブルス（2位）三瓶・松坂

伊勢に行く途中東京の三井生命に寄って橋本トシ子に練習をして貰った。シングルの決勝はカットの菊田（福女）、この時は安心して見ていた。同じカットでも橋本は違う。勝てる訳がない。ランク入りの直前で東京のカットの試合を見ながら橋本と練習させた事を悔やんだ。大事な試合を前に自信喪失につながる試合はやらせるべきでなかったと思う。

三瓶は郡女卓球部の秀才と私は思っている。1年のときは家事をしていた。それに解放されてから力をつけて来た。

私の卓球ノート（No.2）に昭和39年1月5日、6日の栃木県真岡でのシングルの練習試合の記録がある。このときは三瓶利子、今泉幸子、柳田恵子をつれてであった。新潟県の選手との試合もあるがそれは省略する。

三瓶（2年） $\left\{ \begin{array}{l} 4-21 \\ 9-21 \end{array} \right\}$  大島（3年）      今泉（1年） $\left\{ \begin{array}{l} 3-21 \\ 7-21 \end{array} \right\}$  大島

練習が終わって真岡の校門の前でバスを待つ間、見送りに来ていた大嶋俊之助先生が「家内が私に

今年は経費は昨年より安く、収穫は多かった」と報告してくれたと云った時の先生は秘々と奥さんに感謝していた。もう一つ、真岡は朝一時間練習するが郡女はしていない。

大島先生とはこの後2、3度はお会いしたと思う。

昭和40年度は青山佳代子が長崎の全国大会に行き県総体では今泉幸子が優勝する。

長崎へは三浦先生と一緒に行くのだが、三浦先生には申し訳ないと今でも思っていることがある。

生徒に関しては、熱心に練習した生徒が9人残った。どうしても1人はベンチに入れられない。それで1人にやめて貰った。何か別に良い方法が無かったかと忘れることのない思い出である。

昭和41年3月12日、県理事会で、高体連の委員長をやめた事を報告する。途端に笹山先生から、理事長を引き受けてくれと要請される。鈴木重郎治、三浦勝美、斎藤正雄の三人から別室で膝づめで引き受けろと云われた記憶がある。

自分の意志から10年もやったんだからと高体連の委員長をやめたのだが、何とも云えない寂寥を感じて志賀さん宅を訪ねて酒を飲ませていただいた。

卓球の試合の度に卓球台の運搬をはじめ色々とお世話になった。

高体連卓球部は零からの出発であったが、県卓球連盟の方は負債を背負っての出発だった。

福島県卓球連盟日記(№1)備忘録の1頁に41年度理事会祝金 YSP3,000円、ニツクク5,000円、入金8,000円、3月14日以内7,000円、大東相互に新たに口座を設けて入金。

成蹊女子高校は、どうしても勝てない相手だった。一度、斎藤先生に私を理事長にしたのは郡女に勝たせない為かと八当たりしたこともある。

理事長と委員長では仕事の比重が違う。卓球部の指導もそれだけ手うすになる。それなら閉基も麻雀も誘われてもやらなければ良い訳だが中々旧来のろう習は直らない。

郡女で最初に名前を憶えた生徒、田中征子(七海)から先生は材木屋と云われていた。然し一方では卓球は下手だが教え方は上手いからよく指導を受けろと陰では支えてくれた。

初めて天和(麻雀)であがったのもこの頃であったと思う。卓球も下手だが囲碁も麻雀も下手、気が多い性である。

昭和41年度は日山良子、三瓶京子、柳田純子、昭和42年度、小幡泰子、上石洋子、小田トキ江、この中に染田がいた。郡山一中で小幡と一緒に卓球をやっている郡女に来てからも小幡・染田のダブルスは中々良い成績をあげていた。私の家は平屋6畳2間に娘達と私達がすみ長男は3畳、4畳半2間に母達が住み、とても下宿させる環境ではなかった。染田は山陰の方に転校する。白河に大越守先生の育てた森山志代子がいた。私の住宅にもう一人下宿させる余地があったら森山には郡女に来た貰ったと思う。三瓶利子と同じ位期待していた小幡は貧血症で、私の期待がプレッシャーになっていたかも知れない。小田の中学の後輩で陸上・走り高跳びの蛇石洋子を小田が6月頃連れて来た。カットに育てる。このカットに森山さんは泣いたと思う。小幡たちは白河女子高校の森山に泣かされる。

2年連続全国大会には行けなかったが、昭和43年度には、呉のインターハイと福井国体に参加する。蛇石は運の良い選手である。

昭和42年度東北高校卓球選手権大会及び国民体育大会東北地区予選が郡山市田村徳定の日本大学工学部の体育館で行われた。競技も終わりに近づき、表彰式を準備していた時、会長に所要があって、帰られた事が分かった。斎藤正雄先生も副会長だから代わりにとも思ったが、斎藤先生は、競技役員でもある郡女の畑校長先生に大会副会長として表彰式に出席していただき、無事大会を終了させて貰った。畑先生からは楽しい話を聞かせていただいたその中から一つ。

先生は戦時中ビルマで日本語の先生をしていた。先生がメコン河を舟で下っていた時、コーヒーを飲みたくなって上陸したそうです。その直後船は爆撃を受けて沈没してしまった。

昭和44年度は運よく佐藤ふみ子が2年生で千葉のインターハイに出場する。この経験は翌年に生きてくる。昭和45年に入り相馬での新人大会には三浦先生の安達に敗れる。県大会は須賀川市で磐城一高、安達高の強敵を控えた朝、父の位牌の前で久し振りにめぐり来たチャンスです、応援して下さい。父をはじめ先祖にお願いする。

この効果は弊一の時ラストの青山に現れた。親爺頼むと念ずるとネットイン、エッジ等が出て、ポイント稼いだ。青山には運があると思った。決勝の安達の時は佐藤が頑張った。良く勝てたと思う。名古屋のインターハイでは名門真岡女子高校と対戦する。佐藤が1勝し、負けはしたがダブルスが善戦した。

真岡と聞いただけで駄目だと思った。だから気楽に戦えたかも知れないが、勝つチャンスもあったかも知れない。戦う前から駄目と思った事には自己嫌悪を感じた。

もう一つ今だに悔いていることがある。ランクに入った時、ベスト8に入ればよい、と、云ってやった。京浜女子の猪狩英子とベスト4をかけて対戦した。苦しい試合の最中に私の失言が頭をかすめることが、(失言がなくても猪狩の試合ぶりは今でも目に浮かぶ素晴らしいもので勝てる相手ではなかった) なかったとしたら今でも忘れられない。

この経験が、よし全国制覇を狙おうと思わせた。

昭和46年度は石井てい子が徳島に行く。

私の卓球指導のノートには、昭和47年4月14日付郡女卓球部は46年度の卒業生をもって一応終わり新しい楽しい卓球部をこれから作る。と決意がかかっている。3年生はいなかった。

そして、この時の2年生の卒業を見ないで郡山西工業高校に転勤する。

西工には4年漸く県大会に出場出来そうになった時に、郡山工業高校との統合が始まり郡山北工業高校と校名が変わり、卓球部の顧問からも外れる。

郡女を去って2年、県の理事長もやめている。

## 卓球とのかかわりの中で

福島県卓球協会顧問 佐藤 昭典

私が卓球を始めたのは、昭和14年小学校4年生の時でした。当時、相馬商業学校卓球部に入り、練習をしていました3歳上の兄貴に時々連れて行ってもらったのが最初でした。

昭和21年相双選手権大会に優勝し、意気揚々として、第一回福島県卓球選手権大会に参加、2回戦にて敗れ大変悔しい思いをしましたことがありました。その当時小高の半谷銀砂工場内の卓球場に週2回位ずつ練習にまいりました。練習相手は半谷、佐藤忠、石田留治郎、紺野幹夫、藤、増子、松崎、只野、畑田、梅原実、塩等々一般人、高校一緒に練習でした。その当時が、大変なつかしい思いです。

昭和22年から23年にかけて、一般では、半谷さんがシングル、私と紺野幹夫がダブルス優勝、高校では、梅原実、畑田がシングル優勝と県チャンピオンは、相馬の時期が続きました。そのころ、双葉中学、相馬中学それぞれ東北大会優勝の成果を上げた時期でもありました。相双の卓球は、戦前・戦後を通じ、半谷卓球場を中心に発展したものと思っております。昭和23年からいわき卓球協会にお世話になり、早や47年、その間実業団の選手、また役員として頑張ってまいりました。

現在は、ママさん卓球の指導に専念しながら、ラージボール卓球の普及に頑張っております。

## 大会の思い出

福島県卓球協会顧問 会津支部 土屋 弘

昭和10年にはすでに喜女卓球部が、創立し部活動を開始していた。顧問の安達善吉先生が指導、その後丹藤祐輔、満田三平、慶徳先生等も良き指導者であった。喜多方市も卓球協会が設立されていて、一般人も活躍して大いに気をはいていた。若松は若商校OBのテニス部、陸上部が主体となり卓球愛好者を集め、小さな大会も開いていたと聞く。昭和23年8月、喜多方から矢部平作、猪俣俊夫、江川昌彦、冠木新助各氏、若松から本田栄、岩田喜一、平出雄次、日夏秀雄各氏、又柳津の橋本新一氏等が発起人となり会

津卓球連盟の設立を見た。会長本田栄、副会長岩田喜一、理事長平出雄次、三役にて運営、福島県卓球連盟に加入した。昭和56年会津卓球協会に改称した。歴代会長 本田栄、吉川景亮、星善六、土屋弘、現在松崎繁、理事長は 平出雄次、土屋弘、千葉恒夫、現在北沢宏。

昭和21年復員し、22年頃から平出雄次氏に、師事を受け、初心者仲間入りした。球歴は、昭和30年ミニ国体に、同年全軟直江津大会に出場。昭和42年壮年で、ミニ国体に。昭和40年岐阜国体卓球競技監督、男子（一般）として参加、個人はいずれも軟式での出場。昭和27年25才で理事になり、卓球界に足を一步踏み入れた。当時は県大会で三回戦まで進むのが精一杯だった。理事会は後藤寿二会長宅の花月で行われた。各地区のメンバーは、県大会のチャンピオン、シニアでは全国のランクプレーヤー争々たる顔ぶれであった。私など卓球を語る事、おこがましいことであった。あれから平成8年役員辞職するまで43年間大変お世話になりました。

昭和29年ロンドンの世界卓球選手権大会で、日本が団体戦アベック優勝、この大会に後藤英子選手も参加され大いに活躍した。翌30年第9回全国都市対抗三競技卓球大会を、会津若松市謹教小学校で開催された。

平出雄次会津卓球連盟理事長を先頭に会員、総力を結集して取組む。会員約30名三級公認審判を取得し、大会に万全を期した。田舎者の我々は世界の王者萩村、田舛、女子では江口、大川等のプレーを目の当たりに見るチャンスを得た。試合は、ただただ感銘を深くした。プレーの連続、何か本当の卓球を自分なりに知った感じがした。この大会には市の保体の応援を頂き感謝しました。

世界の王者になった日本の卓球が契機になり一般の職域大会が、軟式から硬式に変わった年でもあったと思う。

私が、進行委員長で昭和62年全国社会人卓球大会を郡山総合体育館で開催された。大会も思い出の大会でした。開会式と会場準備が遅れ、タイムテーブル計画通りいかず、選手控室、審判員も混雑し、正常に戻るまで進行委員、審判員が食事を遅らせ、午後2時なんとかタイムテーブルに漕ぎつけた。役員皆さんにお世話になり、役目が遂行出来たこと今でも感謝の念で一杯です。ただ残念なことは、選手2名二日目、タイムテーブルに遅れ失格になった。これもルール、仕方のない処置だった。

第40回中津川国体に監督とし参加、一回戦は佐賀を破り、2回戦で広島に負けたが、反畑、伏見、安藤、鈴木の各選手が一生懸命頑張った。特に反畑主将には未熟な私を支えてくれた。その人柄に心からお礼を申し上げます。

卓球協会として最大のイベントは、平成7年第50回福島国体の成功だ。第50回国体が福島県と決定を見たときから、役員は国体終了まで改選なく協会一丸となり、卓球競技総合優勝を期すべく準備や選手強化に全力を尽くす決意をする。

県内選手で参加する当初の考えが、平成6年後半から勝つ為に、輸入選手補強の声が高くなる。結局これに依り、選手の入替も余儀なくされ、平成7年国体開始まで、何回も役員会議を開き、会長、理事長始め関係者が頭を痛めた日々が多かったと思う。最終会議でなんとか決定まで進む。決まった以上は心新にし協会一同結束をかため成功に邁進した。

協会一同の努力が結果され、結果は総合二位となり面目をほどこした。だが忘れてならないものがある。喜びの陰に涙した人がいた。何から何までも心に残る国体であった。

## 「第50回ふくしま国体審判員」を育てて

第50回ふくしま国体副審判長 壁谷之夫

昭和70年に第50回国体が福島県に（第2回目）来ると言うことが、昭和57年頃から耳にするようになった。そこで中学生の強化に力を入れてほしいと云うことで、私とその責任者に選ばれ卓球指導の出来る先生方と相談し、夏・冬休みを中心に強化合宿等を各地区で実施した（私は特に実技より精神面の指導を受け持った）回を重ねる毎にその成果も上り始めて皆と喜んでいるところに、「昭和63年

7月18日付で、第50回国民体育大会審判員養成講習会の講師に委嘱します」第50回国民体育大会福島県準備委員会、会長 松平勇雄氏よりの委嘱状だった。

私は今迄中学生の強化にのみ力を入れていたのに今度は、審判員の養成と云う仕事に専念せねばならなくなったわけであるが、この仕事は今迄のように先生方に相談して出来るものでもない。先づ何かから手をつけるか困った。そこで第一にルールの勉強から始めた（大体は知っているが）ルールブックを隈無く理解し暗記した。でも覚えたと思う反面忘れるのも早かった。だからルールブックは風呂以外は身から離さず持ち歩いて暇さえあれば、同じ場所を何度も繰り返して学習した。この事が一番多くの時間を要したし辛かった。

さて、最初の「審判講習会」は昭和63年8月21日、郡山中央公民館・サンライフ郡山で行った。その方法は、午前9時より120分間、私がルールの講義をする。その後60分は講義での不明な点や、平素疑問に思っていた事を出し合って受講生全員で話し合って結論を出させる。解決しない時私が正しい指導をする。そして昼食後、ペーパーテストの始まる前に質問を受ける。質問が出なくなったらペーパーテスト（約60分）

それが終わって実技（腕の上げ方等）を30分位やって講習会全部終了する。

以上の方法で、昭和63年から平成7年4月29日迄8年間で「審判講習会」69回、場所は、福島体育館、郡山中央公民館、サンライフ郡山、須賀川体育館、須賀川アリーナ、白河体育館、船引体育館、平工業高等学校、原町体育館、会津若松市、と県内全域で実施した。一般人275名、高校生353名、合計628名の日本卓球協会公認三級審判員が誕生したわけであるが、ここでホッと安心するところではなく大変心配なことが出てきたのである。

それはルールの第2章競技ルールの抗議（Appeals）の所の2・3・3・5に「個人戦での抗議は、問題が生じた場合に参加した競技者のみが行うことができる。団体戦での抗議は問題が生じた試合に参加したチームの監督のみが行うことができる。即ち国民体育大会の卓球競技は全種目が団体戦で、しかも各県1チーム以外はすべて各ブロックの予選を勝ち抜いて参加するチームばかり、しかもその監督から抗議を受けた時即座にハッキリと正しい判断を下さねばならないわけである。従って20代の若い審判員ではその監督に立ち向かえるかどうか？ 或る程度の年齢が必要でルールもしっかりマスターした度胸も要求されると考えた。そこで三級合格者の中から30代以上の男性40名、40代以上の女性（子育てが一応終わった）40名、計80名を国体審判員の候補者と仮決定をし本人からの承諾を得て、特訓に入ったが声は低い。動作が緩慢でなかなかスムーズに運ばないので、リーダー養成を考えた。上級の二級審判員資格に挑戦する者を集めたがさっぱり集まらない。理由を聞く则ち自信がないと遠慮するのである。そこでこちらからめほしい者男性8人、女性8人を説得して、やっとのこと二級の資格を取得してもらうことにした。しかしこの勉強が大変だった。船引町と須賀川市の人達は、夜の勉強会（1日2・3時間）、その他のいわき市、会津若松市の人々は日曜日に私が足を運んでマンツーマンの特訓をして実力をつけさせた。

その甲斐あってか、全員合格した時はとても口には出せない嬉しさだった。「上級公認審判員おめでとう……」

◎平成10年4月1日より

日本卓球ルールの改正が行われた。

審判員については……

○従来の資格→新改称

「名誉審判員」→「名誉レフェリー」

「1級公認審判員」→「公認レフェリー」

「2級公認審判員」→「上級公認審判員」

「3級公認審判員」→「公認審判員」

やっとなら二級審判員が誕生した。それも女性が8名（これは福島県で始めてである）大変すばらしい事だ。男性に負けず立派にやってほしい。

### ◎審判員の任務

1. 主審は、競技上の事実の判定に対して全責任を有する。このことに伴って、競技者が不審を抱かぬよう細心の注意を払うこと。又宣告は、正しい発音と、明快な音声をもって行うこと、手によるジェスチャーも、節度あるものにする。
2. 副審は、主審と十分な協議をする。任務の分担をする。(サービスやその他に主審と判定権が同等のものがあるので)副審が2名なので(福島国体では)

#### ① 主審に向かって右側の副審が、タイムキーパーを行う。

タイムキーパー内容は、練習時間・実競技時間・ゲーム間の休憩時間・怪我等によるゲームの中断時間の計測を行う。

#### ② 促進ルールが適用された場合、レシーバー側の副審が、起立してストローク・カウンターを兼ねる。

#### ③ カウント器の操作

競技者が到着したらゲームスコアの表示を「0」「0」にする。次に主審の宣告で点数の表示をする。

◎公認審判員が自覚と誇りを持つよう常に心掛ける。そのためには、ルールに精通し、公正で的確な判断と、敏速な処理が行えるように日頃から審判技術の向上に務める。又審判員の使命を考え、審判実務については常に反復練習を行い、的確で素早い判定技術を身につけることである。

○コート主任……上級公認審判員の資格を取った人によって貰った。

種目別：成年男子1部・2部、少年男子

種目別：成年女子1部・2部、少年女子

以上の種目の団体戦だったので、男性には男性の審判員を、女性には女性の審判員を配当した。

### ◎審判実務

上級公認審判員の有資格者になったからには、先ず審判員の任務について充分知っていなければならない。そしてそれが実際の試合にどれだけ生かせるかである。

私も平成2年に始めて東京の綾瀬にある東京武道館で行われる、平成2年度全日本卓球選手権大会と(12月下旬)、3月の下旬に東京体育館で行われる東京選手権大会に、審判実務で参加したが、先ず、会場の広さ、ボールの速さにびっくり、思うように声は出ない。手信号も自信をもって出来ない。それに東京の審判は赤ブレザー、私は県卓協で決まったものが無いので、紺のブレザーを着用しての審判なので、一番目につく為夢中で心臓の止まる思いだった。

そこにいくと、東京の赤ブレ審判員は、試合の流れを滞らせないで、スムーズに運んでいた。

私のようなぎこちなさが見られないのである。そして、とても親切に教えてくれた。私もそのように10試合位やったら肩に力が入らず、とても良く出来るようになった。

そこで、審判員に私と同じこの経験をさせる事だと考え、国体事務局の今泉一二君、県理事長の平石家治氏、事務局長の伊東守信氏に話をし、何とか派遣の了解を得て、審判実務に入ったわけである。

最初に、平成6年11月14日から3日間、長野県桧川村ナショナルトレーニングセンターで、第3回地球ユース選手権大会日本代表決定大会に6名、東京から20名、私が日卓協より審判長に指名された大会だった。

次に、平成6年12月、綾瀬の東京武道館での全日本卓球選手権大会に15名。

平成7年3月下旬の、東京選手権大会に16名合計38名が、福島国体の核となって活躍することだろう。

又コート主任とそれと一緒に活躍する人達で、7月より毎土曜日夜、須賀川に集まり、選手団の入場、退場等の誘導から、その他細かい事についての打ち合わせは大変だった。

今思うに国体は大変でした。よくやったなと感心します。

先輩の副会長さん方から、審判は大変だといつも云われていました。しかし審判が良く出来ればその大会は大成功だと云われていたので、やりがいもありました。

審判で何のクレームもなく出来たのは始めてだと云われ、満足しています。  
審判の成功は、大きな大会に出して「審判実務」をさせた事と思っています。  
どんな大会が来ても立派にやる自信ができました。

## 卓球こそ わが人生

福島県卓球協会顧問 松崎 俊一

昭和22年春、20才で勤めた郡山市立桃見台中学校は、新制中学校として桃見台小学校に併設されたもので、2、3年生は高等科の男子生徒が進級の形で移行した。1年生のみが戦後初めての男女共学の生徒で、校舎は高等科の建物をそのまま使用した。

広い中央廊下に卓球台が1台置かれてあり男子生徒が楽しそうに遊んでいた。ここで初めてラケットを握り、教えてもらって熱中した。戦時中の学生生活はスポーツとは無縁で、こんな面白いものがあったのかと。3年目に3年生の担任となり只1台の卓球台を自分のクラスの教室に運び込んで、練習した。放課後掃除当番が机の半分を廊下に出し、残り半分を教室の両側に重ねて真中を空けて卓球台を入れる。そして男女十数名の生徒が交互に打ち合う。ミスすると交替するきまりなので真剣そのものであった。天井には60Wの電球が1つぶら下がっているので球が見えなくなって終わり。早朝から練習、授業10分前に生徒全員で机を並べる毎日だった。クラスの生徒には感謝あるのみ。1秒を惜しむ練習でメキメキ上達して、この年の市中体連大会で男女とも優勝した。特に女子は強く専ら安女、郡女、社会人を相手に練習して引けを取らなかった。この時の生徒が高校に進学して3年生の高校大会で、松崎周二（安高）七海和子（郡女）がダブルスで優勝している。

週5日制だったので、土・日・祭日と一日も休むことなく朝から夕方まで練習、ロクに食べる物もなく空腹をかかえ頑張った事は称賛に値する。

6年目に郡山五中と改名されて新校舎に移った。空教室が幾つかあり1つを卓球室として専有して時間が空いている時は何時でも利用した。宿直の晩など一人でサービスの練習をした事を思い出す。市内大会は常勝で、29年から開催されるようになった県中大会で男子が初優勝を遂げた。

また、同年から開催された県中学選抜大会（須賀川一中主催・高久田大一郎氏）では、男子が3連覇、女子は壁谷氏の率いる瀬川中が3連覇して共にカップをもらい切りにした。五中9年間の卓球に明け暮れた佳き時代の思い出である。

31年に郡山一中に転勤、大規模校で1つの体育館の中で室内競技がすべて行われるので卓球は壁ぎわに追いやられて練習もままならない。それに進学指導の補修（数英）で時間をとられて卓球で生徒と一緒にいることが少なくなった。

市の中体連卓球部長として、大会会場の確保が頭痛の種だった。安高、郡商、郡工、安女等の講堂を借りたが一中に移ってからは会場は一中に固定し、台は郡商からリヤカーで運んで実施するのが常であった。終了後リヤカーで返しにゆくのは大変で生徒がかわいそうでならなかった。郡商の顧問の本田克彦氏にはお世話になった。

35年から県大会が実施されて、会場は郡山一中で行われたので、責任者としてその運営には苦労した。37年の大会では男子が準決勝で中村一中と対戦したが、オーダーミスで1-3で破れた。相手が優勝しただけに残念だった。まして中学校の教員として最後の年だっただけに無念の思いが残った。中学校生活16年に別れる事になった。

38年に第一次団塊の生徒増の為に新設された郡山西工業高校に移った。第一期生の学年主任・生徒指導部長として、新しい学校作りで卓球どころではなかった。3年目の終わりに父兄の寄附金によって体育館が建ち卒業式を行うことが出来た。

生徒は郡山市外から通っている者が多く、交通の便の悪さから部活動に参加する者は少なく、卓球部の顧問とは名ばかりで指導する暇もなかった。正直いってこれで卓球とは縁が切れたかとホッとす

る一面もあった。しかし、大会の組合わせ会に出席してびっくり仰天、朝から各校の顧問と生徒代表が集まって一日がかりの仕事だ。顧問は卓球についてズブの素人が殆どで全て生徒まかせ、特に有力選手を抱える学校の生徒が慣れ合いで取りしきっていた。おかしな慣習だった。

43年に、地区委員長の宗像次男が郡山卓球協会長を引き受けるようになったのでお前がその後をやれとの事、市保育所保護者会長・町内会長等をやっていたので、とても引き受けられないと再三断ったが他に適任者がいないとのことで止むなく引き受けるハメになった。早速の初仕事は、組合わせ会の生徒参加を中止して顧問のみで行うことにした。ルールさえ作っておけば簡単なことである。

県大会の際、地区委員長として運営に参加するのに自校の生徒が出場しないと旅費の支出に支障があるので、別枠で1名確保することにし、その適用第1号は僕だった。45年、専門委員長に大橋征氏を選出して以来62年に退職するまで、その補佐役として、高体連卓球部のご意見番としての職責を全うすることが出来たことは誇りに思っている。

県卓球協会の中核は、高体連関係者が占めているので、我々や高校生が範を示すことが一般や小学生のマナーの向上に役立つことだった。

その高校生がゼッケンは忘れ、オープンハンドサービスは守らない。監督は、試合中一球ごとにベンチによんでアドバイスする有様だ。厳しく改善に取り組んだ。3年ほどして漸く何とかまともになった。

県の高校の大会の組合わせ会も出場選手校の顧問が一堂に会して行っていたが、各地区委員長がその地区の代表として作業に当ることになった。地区によっては自校選手の組合せに苦情を云う顧問もいて、委員長が立腹して替わってやらせたら、とても大変なことがわかって詫びたことなどもあった。

インターハイの県大会の学校対抗の2位は組合せに左右されるので、ベスト4からのリーグ戦で1、2位を決めること等新しい方法を取り入れた。

県総体に新人による団体戦は、1年生対策も考えて実施し現在に至っている。

48年春、永年勤続者の強制移動で、宇賀神氏と交換で郡女に赴任することになった。男子高から女子高にかわって鬼の松崎が佛の松崎に変身したと云われた。前年度から宇賀神理事長の仕事を手伝っていたが、この年から本格的に事務局として活動することになった。まず財政の確立が急務で、会計に菅野源吉氏を得て、その堅実無比な仕事ぶりによって納入金が飛躍的に増加した。

49年から新設された郡山総合体育館が利用できるようになった。それまでの県中の高校大会は郡山市内の高校の体育館で実施したが、卓球台が少なく試合の終了が夜になることが多く、女子生徒の親からは心配の声が寄せられた。総合体育館では土日は一般人の使用が原則なので高校には貸さないという。高体連事務局では、大会は土日を中心にして行うように固執したが、公認の大会を授業日に行うことが道理なので平日に体育館を借りて実施した。他種目でも卓球に右ならえてやるようになり、それが当たり前になった。

53年高校総体の卓球が県内で実施されなかったことは返す返すも残念だった。郡山でと主張したのが裏目に出たのだと思っている。

50年から54年まで三浦理事長の下で協会は確固たる基盤も出来、登録者の増加で予算も潤沢になり、東北の万年6位から浮上して、2、3位に食い込むようになった。

53年9月に待望久しい全国大会を開催することになった。全日本社会人卓球選手権大会である。僕は実行委員会事務局長としての大役に汗を流した。プログラムの広告獲得に奔走した。授業の合間や放課後に自転車で、遠くは菅野源吉氏の車で回った。予想をはるかに超えて、余剰金を協会の積立金として残すことが出来た。組織の点では進行の責任者としての会津の土屋弘、渡部洋一両氏のコンビの綿密な仕事ぶりが忘れられない。

その後、地の利から郡山総合体育館で4つ全国大会が開かれたが地元の故でいつも運営に参加することが出来て、全国レベルのプレイを眼のあたりに見て感激することが多かった。

特に、63年11月に開催された全日本卓球選手権（少年の部）で競技委員長を務めたことは望外の喜びであり、生涯の宝である。

62年春の退職まで卓球協会の各種会合に会場を提供してくれた郡女には謝意を表したい。

私が郡女に赴任した時には、卓球部員が僅か8名で、3年生と2年生が各2名しか残っておらず（前顧問の宇賀神氏の厳しい叱責の故か？）学校対抗予選通過もならず、県大会不出場という創部以来の窮地にやられた。危機をのり切るべく、チームワークを第一に考え、「一人はみんなのため、みんなは一人のために」をモットーに、部員を中心にして自主活動を推し進め、話し合いによる全員合意の無理のない継続的練習を大切にした。その甲斐あって、3年目の県高校大会では団体で準優勝（優勝は西郷徹夫氏の引いる相馬女子高）を果たして東北大会へ駒を進めた。全くの無名選手の集まりが、団結の力で勝ち取ったものだけに、その喜びは言うも言われぬものだった。それ以来連続東北大会出場を重ね、53年高校総体に備えての強化指定校となり、練習を積んだが準優勝で終わり、全国大会に出場ならず無念の涙をのんだ。以後、団体では東北大会出場の常連となったが、喜女の全盛時代とぶつかり常に苦杯をなめさせられて、全国大会出場の夢は成らなかった。県大会等出場の際は、選手以外の生徒も旅費は全員平等に負担して可能な限り連れていった。二十人余も泊ると実に賑やかなものだった。

合宿も楽しい思い出だ。宿泊所がなく教室の床に畳を敷いて生徒は寝る。僕は、机を並べてその上に畳を敷いて寝る有様だ。生徒は緊張し、僕はちょっぴり窮屈だった。10時消灯、卓球部は模範的だと巡回の人には何時もほめられたものだった。食事はとてもおいしかった。家庭料の生徒の献立は堂に入ったもので授業の成果の現れだった。

僕は、郡女14年の勤務の中で一度もクラスを担任しなかった。卓球の関わりが障害になったと思っている。しかし、その間に育てて卒業させた卓球部員は、約百名で2クラス分の人数だ。退職後その子達たちが「松卓会」を作って毎年集まってくれている。教師冥利に尽きるというべきだろう。

平成7年の福島国体では、副会長という立場で関与し、協会の総力をあげた体制ですばらしい成績を残すことができ、心残りなく後進に託する幸せを味わっている。

書きたいことの一部を記して筆をおく。

## 南東北弱小三県

福島県卓球協会副会長 深谷 秀三

福島大学2年生の時、自己流で始めた卓球で、県総体初出場があれよあれよという間に、決勝まで進出、日本大学の反畑選手にこてんこてんにやられたことが、脳裏に焼き付いている。ベスト4の選手が、即国体予選に県代表として出場する時代であった。秋田県本庄市で行われた東北大会は、そのレベルの高さにただ驚かされた。その後、何度か国体の東北予選会に出場する機会があったが、ただ出場するだけで、1勝することも適わぬ時代であった。特に屈辱的であったのは、ある県と対戦した時に、その県のオーダーは、4名の選手の弱い順に組まれていたことである。福島県は、ここまで見くびられているのかと、泣きたい気持ちであった。それだけ、実力的にも劣っていたことも事実であった。

その後、監督としても長い間東北総体にかかわってきた。そのころ、福島県は、宮城県と山形県の両県とともに、南東北弱小三県と揶揄されていた。こんな悔しい思いがあって、福島県卓球協会に強化部が組織されることになったのである。昭和49年に強化部が発足したが、その年に第1回の東北総合体育大会が開催された。（それまでは、各種目ごとに国体予選会を実施していた。）場所は、盛岡市であった。その第1回大会で、成年男子で福島県が見事に優勝することができ、強化部の必要性を痛感したものである。その時の強化部長が、現副会長の平石家治氏、男子監督が私であった。昭和55年に、平石さんから強化部長を引き継ぎ、平成7年までこの職にあった。

福島県が、東北の予選を通過して国体に出場できるようになったのも、強化部ができた後である。少ない予算の中で、選手選考法の改善を図り、選手強化のためにいろいろな手立てを考えた。昭和60年からは、ふくしま国体の強化対策が真剣に考えられ始め、現在に至っている。福島県独自の大会が続けられているが、そのすべてが、小中学生の強化が前提にあるということは、言うまでもない。中学校新人大会、中学校新人選抜大会、小中学生学年別大会などは、ぜひ継続していきたいものである。中

でも年6回行っている小中高校生選抜強化リーグ大会は、最大の強化事業であろう。関係各位に敬意を表する次第である。いつの東北総体の後であったか、宮城県と山形県の卓球関係者に、「福島県を南東北弱小三県から除名する。」と冗談半分に言われたことが、今でも忘れられない。

## 「回想」



### 福島県卓球協会顧問 伊東守信

昭和55年2月の県卓球協会定例総会において、平石理事長が誕生し、事務局を須賀川に置くことになって私伊東が事務局長、渡部氏が会計に選ばれた。それから平成7年第50回福島国体までの15年間、体調を崩し、半年間に及ぶ入院生活を強いられるなど様々な出来事があったが、周囲の皆さんの御協力のお陰で無事任務を遂行できて、本当に嬉しく思っている。特に選手強化に力を注ぎ、三浦会長はじめ協会役員の皆さん、そして関係各位の努力の結果、地元国体で本県が素晴らしい成績をおさめ、運営その他を含めて大成功裡に終了できたことは、関わった一人として最大の喜びとなった。余談になるが、早くから民泊受け入れを希望していたので、4月に新築に着工し、8月末に完成、どうにか間に合わせることができた。兵庫県成年女子1部の一行4名を迎えたが、家族にとっては本県選手団同様、いやそれ以上に応援に力が入ったのも、成り行きとしては当然のことだった。悲喜交々の毎日であったがこれも今ではなつかしい思い出の一つとなっている。これが縁で今でも交流が続いている。毎年のようにスキーに来る者、大学生で全国ランクに入り、卒業後も実業団で活躍している者もいて、遠くから家族全員で声援をおくっている。

さて、就任当時のことを振り返ってみると、前任の松崎氏が、それまでの協会内部を見直し、改革、改善に取り組まれたことは、以後の事務局運営に大きな影響を及ぼした。特に本部の庶務と会計の分離、各支部事務局への働きかけと改善、大会運営上の申込及び選手変更期限の厳守、開、閉会式を含め、選手のマナーの向上等々に力を注がれた。その主旨が徐々に行き渡り、けじめのある運営ができていった。それにしても県予選から全国大会申込みに至るまで、仕事の分量はかなりのもので「手書き」まで引き継いだ私として、大変神経を使い、慣れるのに2~3年かかったことなど今ではなつかしく思い出される。国体が近づくとつれ、特に深谷秀三氏そして今泉一二氏には仕事の何割かを受け持ってもらったことは忘れることが出来ない。あらためて紙上をかりて感謝申し上げたい。この70年史発行を機に、本県卓球界、そして卓球協会が益々発展することを御祈念申し上げ、ペンを置くことにする。

## 卓球との出会いと旅路

### 福島県卓球協会副会長 平石家治

昭和30年4月福島県立須賀川高校へ入学。

高校生活で何か部活をと考えたがとくに自分が得意とするものがなく、ただなんとなく卓球部へ入部した。練習にも参加せず一学期も終わろうとするころ、化学の高橋宗司先生と出会った。その先生が卓球部の顧問だったのである。やさしい先生で私の家が学校まで徒歩2分ということもあり、先生は家まで迎えに来てくれ卓球で楽しく遊んでとは熱心に誘われた。これがきっかけで、卓球をはじめた。これほどまでに卓球に係わるようになるとは想像できなかった。人生で一人の恩師に出会うことが自分の運命を変えることになった。以後、数多くの卓球関係の仲間達と出会うことになる。

高校2年の県総体で初めて地区代表になり、下級生の練習相手にも何とかなれるようになった頃、須賀川市の卓球関係者が選手強化の講習会を開催してくれた。会場は夜間高校の体育館だった。

高久田大一郎氏、及川邦夫氏、滝沢昌昭和氏、それに飯坂から転居してきた井上安正氏そして講師

として井上氏の友人で早稲田大学の野村監督が大学生をともなって来てくれた。

林選手、高柳選手などが印象に残っている。その会場で野村先生が私に対して直接手を取り指導され「君には素質がある。頑張れよ」との一言が以後の自分にとってとても勇気づけられ励みとなっていった。それからは毎日卓球だけの生活となった。3年の高校総体で三位、国体予選会でも三位となり、その年第12回静岡国体（吉原市）へ出場できた。そのうえ天覧試合で大変感激した。試合は東京代表に惜敗したが、悔いはなかった。笹山進監督、諸星（相馬高）三林（福島高）と私だった。当時高校で活躍した選手には、高城（原町高）林（磐城高）矢吹、安藤（郡商）木村（福島高）馬庭（福島商）などがある。同年郡山工業高校体育館で開催した東北高校選手権では、諸星君が優勝した。

また、須高では、1年生に横山広昭君が入部し、卒業後もよく練習を共にし、ダブルスでは県大会で数多く優勝し、全国大会に参加したものである。

社会人となって、公立岩瀬病院に奉職、滝沢氏を初め卓球に理解ある上司に恵まれた。看護学院には、卓球台が常備されており、当時では環境の整った職場状況であった。須賀川労働基準協会主催の管内職場大会で10年連続優勝、福島県市町村共済組合主催の県大会での5年連続優勝は特に忘れられない。

この頃から県卓球協会とも係わりをもつようになり、県南支部が独立発足の初代理事長として県卓球協会への参画が本格化するのである。昭和55年第7代の理事長として、16年間卓球協会の仕事をさせていただいた。須賀川に事務局を移し、事務局長、伊東守信氏、会計、渡部信行氏と素晴らしい仲間めぐりあうことができ、思い出多い出会い感謝するのみである。その間、東北卓球連盟への参画、日本卓球協会東北代表理事5期10年の参画で東北、全国に友人がたくさんできた。アメリカオープン卓球大会の日本選手団の団長として、ロスアンゼルスに派遣され、当時の副会長で国際卓球連盟会長の萩村伊智朗氏との出会うことができたのも自分にとって忘れられないものである。

平成7年、第50回ふくしま国体が須賀川アリーナで開催され、天皇皇后両陛下をお迎えして、盛大に全行事も無事終了できたことに関係者の皆様に感謝する次第である。国体の経過等苦労話は数えきれないが、今はこれを区切りとして理事長職を辞任したことで心に安らぎを保っているところである。人との出合いを大切に、今後の人生を卓球と共に歩き続けていきたいと考えている。

## 回 想



### 福島県卓球協会審判委員会 委員長 野 木 孝 夫

東京三鷹市上連雀に昭和20年代後半から30年代にかけて大活躍をし、当時世界チャンピオンの萩村伊智朗氏が練習していた卓球練習場があった。昭和30年ごろ学生時代を三鷹で過ごした私は、この練習風景に直に接し、身震いを感じたのを覚えている。

昭和38年新採用で勿来工業高校に赴任早々卓球部副顧問を命じられた。幸いにも正顧問に中学校で選手の育成にすばらしい実績をあげてこられた三宅照夫先生がおられ、その指導法を学ぶことができた。当時は、コンクリートのたたきの上に2台程卓球台を出しての練習であった。大会ともなると近くの磐城農業高校や勿来高校から卓球台をかき集め、夜遅くまで会場設営にあたったものである。

現在の名誉会長である三浦勝美先生より、平工業高校（現在はいわき市庁舎のある場所）の図書館の2階で3級公認審判員の講習を受けたのは、昭和41年であるからかれこれ35年ほど前のことになる。白系統以外の濃単一色のユニフォームで、暗幕を締め切った熱気ムンムンとした体育館の中で黙々と白球を追うという、どちらかというと暗いイメージの競技のように思えた。今の広い換気の行きとどいた体育館で、ライトブルーの卓球台、オレンジボール、そして色とりどりのファッションユニフォームという明るいイメージとは隔世の感がある。

理屈では科学的・効率的な練習法が望ましいと思われるが、経験の無い私にとっては、卓球の上達

は体力作りと練習量であるという信念で、正月の2日を除いて、毎日5キロのランニングと20分のハードトレーニングを課し、夜食持参での練習を重ねた。当然のことながら保護者からの非難の声もあったが、話し合いを持ち協力していただいた。選手の熱心な練習の姿勢にも恵まれ、特出した選手もいない中で、昭和44年、昭和48年と、高体連県大会団体優勝の栄を得ることができた。平工業高校の大橋征先生、磐城一高の山崎勲先生、鈴木理介先生、郡山女子高の宇賀神喜嗣先生、松崎俊一先生、喜多方工業の清水徹先生、喜多方女子高の渡部長三先生そして事務局を担当しておられた伊東守信先生（当時は石川高校だったと思います）との出会いは、このころである。全国インターハイでは磐城女子高のコーチをしておられた信澤先生とは枕を共にし、それぞれの先生方からの特色ある指導方法を吸収させていただいた。

昭和53年5月31日に日中文化交流協会・日本卓球協会主催、いわき市・福島県卓球協会主管で、いわき市常磐の関船体育館に特設会場を設営し、日中交歓卓球大会が催された。現会長の西郷徹夫先生や副会長の平石家治氏等とともに主審を努めさせて頂いたが、国際試合の審判は始めてとあって脇の下にじっとり汗をかきながら進めたことが思い出される。当時の資料によると、中国の男子選手団には、郭躍華、李振持、黄統生、成応華、魏京生、任国強の各選手が、日本側より、高嶋規朗、阿部博幸、坂本憲一、前原正治、葛西順一の各選手が出場し、1WGSの団体戦が行われたが、3-4での惜敗であった。女子団体戦は中国側より曹燕華、童玲、張徳英、孫敏の各選手、日本側より、長洞久美子、嶋内よし子、高橋省子、神田絵美子、福田京子、菅谷佳代の各選手が出場したが、0-7の結果となった。特に中国選手の郭躍華、曹燕華、童玲は後に世界チャンピオンになるが、郭の鉄壁といわれるまでの完成された卓球、曹や童は、当時14歳という若さで、はつらつとした華麗な妙技に堪能させられた。

中国の卓球といえば、平成8年に、いわき市と友好都市締結をしている撫順市の招待を受け、スポーツ交流訪中団の一員として訪中の機会を得、公営体育学校卓球科での学習状況等を張品清副校長の案内で見学させて頂いた。毎日実技だけでも1日6時間という徹底した指導を目の当たりにして、中国の強さもありなると感じてきた次第である。

平成7年のふくしま同体の卓球競技では、やればできるという自信とすばらしい感動を体験させて頂きました。

すばらしい成果のなかで協会発足70年を迎えられましたこと誠におめでとうございます。

福島県卓球協会の益々の発展をお祈りします。

(平成11年5月31日記)

## 卓球をとおして



### 福島県教職員卓球連盟理事長 菊地 敏 美

私が卓球を始めたのは、小学校4年生頃だったと思う。当時母校の小学校には、空き教室に古い卓球台が2台おいてあった。もちろん体育館にも3台おいてあったが、それらはいつも上級生が使っているため、下級生はもっぱら空き教室の古い卓球台を競い合って使っていた。ゲームは5本勝負で「ノータッチ」と呼ばれる1回もボールに触れられない場合は、その場で負けというルールであった。もちろん勝ち抜き戦で、強いといつまでもやれるため、自分も強くなっていつまでもやっていたと思ったものだった。

喜多方第三中学校に入り卓球部に所属したが、1年生の頃は先輩の球拾いに明け暮れた。2年生のときに故連沼昭先生が赴任してこられ、初めて専門的に卓球を教わった。あの頃は、中体連県大会に出場することが夢で、耶麻郡優勝を目標に毎日遅くまで練習に打ち込んだ。そのかいあって、県大会に出場することができ、ベスト8に入ることができた。今思うと、連沼先生からは、卓球の技術的なことともに、努力することの大切さと必要性を教えていただいたと思っている。

喜多方高校に入ってから卓球を続けた。上級生がいなく苦勞したが、手代木健、三留昭男両顧問

の先生とOB会の方々の励まし、そして後輩に恵まれ十分な活動ができ、しかも県大会3位という成績をおさめることができた。

大学では、長馬先生や上石先生と一緒に活動することができ、また、充実した時間を過ごすことができました。お蔭様で東北学生リーグ3部から1部に昇格することができ、京都で行われた全国国公立大学卓球選手権大会では3位に入賞することができた。今でも京都の暑さと入賞の喜びは鮮明に思い出すことができる。

教職の道に入り、振り出しが小学校だったために卓球をやる機会は少なく、陸上競技や水泳の指導に明け暮れた。それでも、休み時間やクラブ活動でたまにやる卓球は楽しみであった。その後、熱海中学校に転勤となり念願だった卓球部の顧問を務めることができた。もちろん技術的なことも指導したが、自分が中学校時代連沼先生から教えていただいた、努力することの大切さとチームワークの重要性もいっしょに指導したつもりである。

荒木先生率いるザベリオ学園と何回か優勝決定戦で対戦できたことは大変光栄である。また、時を同じくして、郡山市において平成2年度第35回全国教職員卓球選手権大会が、福島県卓球協会ならびに郡山市卓球協会、そして多くの先生方の協力を得ながら盛大に開催できたことはこのうえない喜びである。

平成7年開催の第50回ふくしま国体においては、深谷秀三先生のお誘いで強化部事務局会計として務めさせていただいた。資金の調達や配分等で頭を痛めたが、おおせいの方のご支援をいただき責任を果たすことができた。国体前の強化練習会や県外遠征では、大変貴重な体験もさせていただいた。大阪の四天王寺学園や上野宮高校などでのトップのきびしい練習や、田外卓球場での宿泊しながらの夜間練習等、その当時は切羽詰まった緊張感のためじっくり考えることもできなかったが、今ではたいへん懐かしい思い出である。また、二本松市で行われた強化合宿では、中国人のコーチを招請し、内容の濃い練習ができた。宿泊先のサファリパークでは、ライオンの泣き声で睡眠不足になった選手も多くいたようだった。

国体本番では、夕方遅くまで会場を沸かせた一般1部男子の対滋賀県戦は、前日の対新潟戦での敗戦の鬱憤を晴らすかのようなすばらしい試合で、応援に来ていた卓球を知らない一般の市民の方にも、感動と勇気を与えてくれたものと思っている。成年2部女子の優勝を決定したシーンは、今での苦勞が報われたように感じられ、昨日のこのように思い出される。それぞれのチームでの、一つ一つの感動するシーンは、緑の下で働いてきた私たちにとって、とても大切な宝である。

卓球と出会って30年が過ぎようとしている。はじめは強くなりたくて、夢中で練習に取り組んでいた。しかし、現役の選手を退いて思うことは、卓球をとおして多くのことを学び、そして多くの方々から貴重なものを教えていただいたということだ。現在は職場の関係で卓球の指導は行っていないが、今までお世話になった方々のために、何らかの形で恩返しできればと思っている。

福島県卓球協会のますますの発展を、心からお祈り申し上げます。

## 「協会役員としての思い出」



福島県卓球協会監査 渡部 信行

協会設立70周年おめでとうございます。

諸先輩が築かれて来られ更に現役役員選手諸君又は各地区の先生方、一般の指導者の方々の更なる協力のもとに21世紀に向けて躍進している事を非常にうれしく感じております。本当におめでとうございます。私も協会の役員をしてきた頃の思い出がありますので(会計担当の頃を思いうかべて筆をとらせていただきます)

約20年前当時の三役(理事長三浦さん、事務局松崎先生、会計菅野先生)は県中地区で担当されておりました。それを県南にバトンタッチということで須賀川で三役を引き受け理事長平石家治さん、事務局長伊東守信先生、会計が私でした。

引き継ぎも須賀川で行われ菅野先生が稿の風呂敷づつみギッシリ書類関係を持参して来られ数年前からの領収書綴、決算書類等がキチット年度毎に整理されていたのが印象的でした。引き継いだ当時会計収入は180~200万くらいであり繰越金は20~30万くらいと記憶しています。

収入源はもっぱら登録料と一般と高校の参加料くらいでした。ですから登録料を県体前に各地区で集金していただかないと4月5月頃の大会運営に繰越金が少なくて穴があきそうになる事もありました。

又参加申し込み用紙には必ず県卓球協会の登録者番号を記入しないと出場出来なくなる仕組みになっておりました。参加申込と同時に参加費を添えて初めて参加資格が生まれ組合せ会議で名前と登録者番号確認し試合ができるようになります。当時の各地区の理事長さんは大変だったことと思います。組合せ会議のたび出張予算がなく手当なし食事のみ、そのうえ参加料不足や登録されていない選手分の立て替え等、私も会計担当の各地区の理事長さんや代行責任者の方々へ申し訳なくも取り立てするしかありませんでした。あの当時がなつかしく思い起こされます。紙面をおかり致しまして当時の各地区の理事長さん、代行者の方々に感謝とおわびを申し上げます。

その後各地区でスポーツ少年団を中心に底辺拡大をめざして熱心に指導育成され卓球登録人員も大巾にアップされて来ました。又県卓球協会主催の小中学生の試合も年間行事に取り入れられて参加料も大巾アップして予算も増加しました。

この頃福島国体が決まり、その為には先だつもの、資金が必要であるとの事で先ず年度計画で毎年一般会計から特別会計へ毎年数十万円ずつ積立の開始が始まりました。国体開催までに全国大会を二度開催。予算もかなり積立てる事ができました。

国体の数年前からは各役員から特別寄付をいただき国体運営資金にさせていただくなど、振り返り見ますと当時の諸先輩方と協会運営の一翼を担って目的の為に苦勞を共にした時がなつかしく思います。特に当時の理事長平石さん事務局の伊東守信先生には公私共ども御指導いただき協会の役員をやってよかったと今でも思っております。又その他にも各地区の役員の方々名前を出せばきりがありません程大勢の人とお付き合いをさせていただいております。

会社の仕事とは別な人の出会い、めぐりあいがあります。これはボランティア精神の仲間だろうかと思えます。現在は会計監査にたずさわっておりますので、特に会計の収入、支出等を監査する毎に毎年協会の確実な発展と低学年の増加、登録人員参加者数将来性を見いだせる資料を見るたびうれしさがこみあげてきます。

諸先輩も役員で卓球協会を引っ張っている方々、又各地区の小中高の指導者の方々等情熱に燃えている人達が大勢いる事が何より頼もしい限りです。

どうかこれからも80年、100年と協会を大きく育ててください。そして東北に全国に福島県卓球協会ありと名実共にすばらしい協会になる事をお祈り申し上げます。

今日の卓球協会を育てて下さった諸先輩そして各地区の関係者の皆さん、本当に御苦勞さんでした。協会70周年本当におめでとうございませう。



## 私の人生と卓球との出会い

前郡山市卓球協会長 宗 像 次 男

卓球との出会いは、小学校4年の秋の頃、小さな小学校に一台の卓球台が購入され、放課後遊びながら始めた。秋から冬にかけて、夢中になり、夕方遅く帰宅し、親に叱られることがたびたびだった。

その後暫く卓球とも離れていたが、昭和25年喜多方商工高校に奉職、S26年の春より卓球部顧問になり、生徒と一緒に放課後クラブ活動に打ち込むことになった。特にS30年都市対抗卓球大会が会津若松市、謹教小学校で行われる事になった。萩村選手を初め一流選手が来るため、是非公認3級審判の取得が必要といわれ、講習を受け7月1日取得、8月の

大会を無事終了することができた。平出、土屋その他の役員達と共に喜び合った。その後S31年4月より33年春まで会津地区高体連卓球委員長の大役を引受け、皆様の御協力を頂き無事務めることができた。S32年の国体では、山形酒田に小荒井俊雄君を引率、喜女の丹藤先生と同行、全国大会の厳しさを味わって来た。S34年4月郡山工業高校に転勤、安女的那知上先生が35年福大に栄転になり、その後の県中の卓球委員長を引き受け、県委員長の宇賀神先生、郡商の本田先生のご支援を頂き、43年3月まで大過なくつとめることが出来た。しかし市の体育館が整備されなかったので、大会の度に会場の借用、卓球台の運搬等、会場の設営に苦労が多かった。S43年4月日本卓球協会本部にて公認2級審判に合格、又4月から進路指導主事になり多忙の為、県中高体連卓球委員長を松崎先生にお願いすることになった。なお郡山市卓球協会長横井県議並に理事長志賀氏等が辞任されたので、その前後策として、郡山三中の佐久間直先生とご相談の上県中支部長を引受ける事になった。早速S43年からの各種県大会の予選等の計画を検討する。S43年の東北高校卓球大会が郡山で実施されることになり、日大の体育館をお借りすることになった。その際、前夜祭の最中に秋田女子高3年今野安子さんが前年度アジア大会に出場したので明日の開会式で、是非表彰したいと云う事になった。その表彰状をわたしが書くことになり、用紙を市内中捜し夜中までかかって、次の開会式に間に合はせることができたのは、今でも忘れる事のできないエピソードである。

尚県総体に先立ち（S47橋本栄一さんを郡山市の会長にお願いし、副会長として補佐の任に当る）S44年1月、中通り卓球選手権大会を郡山三中と郡女の2校で開催、雪の降る寒い日であったが盛會に終わり、現在も継続されている。S44年秋田で行われた東北大会にダブルス2チーム、シングルス2名出場するも壁は厚く夫々一回戦で敗退する。S45年盛岡で行われた東北大会に団体出場、残念ながら一回戦で敗れる、46年高校総体全国大会（徳島市体育館）に参加、ダブルス（青山、水野）一回戦で惜敗、47年3月健康を害し生徒の卓球指導も思うにまかせず、その上役員会も欠席がちになり、49年4月から定時制に移り、生徒の顧問も辞めた。一時期卓球から遠ざかっていたが、S54年9月21日～23日、全日本社会人卓球大会が郡山総合体育館にて開催されることになり、再三の打合せを重ね、広告等をお願い、準備が大変であったが、この大会終了後、55年3月より郡山市卓球協会長を引受ける事になった。県の理事その他は全て辞退する。S56年3月教員退職を記念して、宇賀神先生と宗像が優勝カップを用意し高校生の競技力向上を祈念し、南東北卓球大会を新設した。福島放送の協力を得て、うすいさんをスポンサーに数年間開催したが、年々高校生の参加が減少している数年前から、中学生を主体に大会を開催し、特に富久山卓球クラブの活躍により、県外からの参加者も多くなり、年を追って盛會になってきている。

平成11年3月末を以て郡山市卓球協会長を辞退する事にした。20年間会長をつとめ年令も80才近くなり皆さんに迷惑を掛ける事が多いと痛感したためである。この20年間さまざまな大会があったが大過なく勤めることができた事を感謝しながら執筆を終わりたいと思う。

## うつくしまふくしま大会



福島県卓球協会理事長 伊藤 秀行

### 【感動の二日間】

うつくしまふくしま大会を、振り返って見ると、緊張と感動の2日間でした。29回、30回大会と様々なすばらしい大会を視察してきて、わたしたちでも開催できるのかと、不安が先に立ってしまいました。

しかし、2日間の大会は、あっと言う間に過ぎてしまいました。閉会式が進むにつれて、大会の感動がようやく伝わってきました。青く澄みきった空、感動する選手、そして私たち競技役員は、これで本当に大会が終わったと言う実感に涙が込み上げてきました。

初日聴覚障害者の和太鼓サークル「馨」の霊山太鼓の演奏に始まり、第1試合が開始されました。2日目は、皇太子御夫妻の御観戦、最後の試合と、緊張の中のできごとでした。その中でも、すばらし

い感動が幾つもみられ、初めて会った選手同士が、試合後握手をし笑顔で会話がはずむ、地元選手の応援団、家族の声援に応える姿がありました。

大会は多勢の人々に支えられました。ボランティア、コンパニオン、そして競技役員、審判員のみならず、とくに盲人卓球の審判員は約2年間数十回に及ぶ審判の練習でした。厳冬の中で、40度に近い真夏の中で、本当にご苦労さまでした。

【うつくしまふくしま大会】、【つなぐ手にあふれる感動わく勇氣】は、選手、家族、そして大会を支えた人々全員のものだったと思います。感動を与えてくれた、第31回全国身体障害者スポーツ大会は、私の生涯の思い出になることでしょう。

## 国体監督の思い出



前福島県卓球協会理事 渡部 洋一

私が国体少年女子の監督をしたのは、昭和51年からの6年間でした。この頃の東北は北三県が強く、本県が東北予選を勝ち抜き、本国体に出場することは、非常に難しいことでした。強化練習を重ね参加するのですが、選手層の薄さはどうしようもなく、東北予選で4位になれば良いほうでした。ただ4年ごとに全県出場できるチャンスがありましたので、私は52年の青森国体と56年の滋賀国体に

監督として参加しました。特に思い出に残るのは滋賀国体のときです。代表選手に井戸川選手がいました。彼女は東北インターハイで優勝という実績があり、期待も大きかったのです。しかし、東北大会では最下位でした。本国体に出場できると言うのに、この結果を思うと頭が痛くなるばかりでした。この年の試合方法はエースが前半とラストの二回出場できる方式でしたので、エースが2勝し、誰か一人が1勝すれば勝てるのです。しかし強化費もあまりいただけない状況でしたので、大変苦労しました。その中でトーアエーヨーで行った一般女子チームとの合同合宿は彼女達に大きな刺激を与えたようです。

滋賀国体の会場は草津市でした。宿舎は市内志那町という琵琶湖の東側にある町で、一般の家庭でした。私共役員選手は大歓迎されました。草津の市長さんは志那町の方で、福島県の一般女子選手は、市長さん宅での宿泊でした。夜には私と少年女子の選手もおじゃまして、歓待を受け、楽しい一時を過ごさせていただきました。

一回戦の相手は千葉県でした。強いチームですので、そう簡単に勝てる相手ではありませんでした。しかし幸いなことにカットマンに強い志賀選手がカットマン選手と対戦するオーダーとなったのです。試合当日には、市長さんの奥様や宿泊した家の方々も駆け付けていただき精一杯の応援をして下さいました。その甲斐あってか、本大会で1勝することができ、選手達と喜びを共にしました。また愛知県との2回戦の時は昭和天皇がお出でになられ、私達の試合を目の前でご覧いただいたことも、良い思い出になりました。

福島県のふくしま国体、そして、その後の活躍を思うとき、本当に強くなったものだと感慨も一人です。今後ますます本県選手のご活躍を期待しております。

## 私の卓球の思い出



前福島県卓球協会強化委員長 伊藤 恵美子（旧姓 渡辺）

卓球協会の70年史、おめでとうございます。

私が卓球を始めてから35年になります。思い出は数えきれないほどあります。その中で勉強や人との大切なふれあいがたくさんありました。

42年富士短期大学に入学、1年生ながら関東学生リーグ戦1部に出場し、その

すばらしさと伝統と緊張に震えたこと、2年生の春季リーグ戦に敢闘賞を頂いたこと等、この2年間は私にとって卓球の原点のように思います。

44年に富士短大の職員として、第3回全日本社会人大会において優勝、ユニフォームの用意がなく困りました。この時男子の優勝が長谷川信彦氏で二人で書いた卓球誌の表紙は今でも大事にしてます。この年の国体（福井）に東京代表として（大関、境田、亀山、私）出場し2位となりました。この時初めての国体出場に開会式の感激が忘れられませんでした。同じ年の全日本にて8位入賞で翌年の名古屋のアジア大会出場につながりました。



この時全日本の合宿に数回参加するようになり、卓球の厳しさや自己との戦いや孤独な辛さを知ったことも大きな財産だったと思います。45年、福島に帰り実業団日東紡福島チームを作り52年まで続けました。

当時の福島はまだレベルが低かった。そこで“福島だって”これにはチーム戦である団体に出ることだと思いました。昭和45年岩手国体に男女が出場、男子選手の中に深谷先生もいました。

46年和歌山国体でベスト8に入りました。（遠藤潤、渡辺三代子、佐藤ふみ子、私）その後入賞はできませんでしたが出場する回数が多くなりました。でも平成4年山形国体では、44才の私が一般で出場と何とも言えないことでした。（東條、深谷純子、私）そして平成7年記憶に新しい福島国体に2部優勝を飾ることができて、たいへん喜んでます。（坂本、東條、私）ほんとうにすばらしい大会でした。

卓球は、生涯スポーツとして近年盛んになり公式戦においても年代別という種目の大会ができ、私たちにもチャンスがありました。全日本社会人、全日本日軟式の年代別で30代の時、優勝2、2位5、3位3で、40代では、優勝4、3位1がありました。この中で40才に入った年の社会人大会です。沖縄の暑い体育館でした。決勝戦、促進ルールでの3セット目で18-20で負けていました。ボール拾いに行った時、物陰から、東京の方から「がんばりなさい」の一声で、ふしぎな力が湧きあがり4本連続とりに逆転優勝をしました。この時うれし涙を流したことを忘れられません。

こうして多くの人の暖かい応援や力添えがあってこそ永く続けてこれました。ありがとうございます。今は千本松毛晒工業の卓球部として理解ある中でやらせて頂いています。これからも卓球を愛し楽しく続けていきたいと思ひます。

（成蹊女子高→富士短大→日東紡福島→千本松毛晒工業）

## 出会い・挑戦・感動・歓び・挫折・感謝 ～卓球と私～

福島県卓球協会会長 西郷徹夫

卓球との出会いは、中学1年生の秋である。

校内球技大会で上位に入賞したのがきっかけで、当時、卓球を指導されていた森口正作先生から卓球部への入部を勧められてからである。

同学年には、渋谷、佐々木、1年後輩には古山、2年後輩には梅原（現：中央大学女子監督）、佐原、佐藤（光）をはじめ、後に相馬高校の黄金時代を築いた諸星光雄（東北高校選手権〈昭和32年第11回大会〉シングルス優勝）をはじめ、昭和34年第13回東北高校大会で学校対抗で優勝したメンバー、木幡、佐々木、反畑（世界卓球選手権〈26回大会日本代表〉）、その1年下の伏見（県高校大会シングル

ス優勝(2連勝)などを輩出した名門、中村第一中学校卓球部である。

2年生から中村第一中学校卓球部のレギュラーとして共に練習に励んできた事を誇りに思っている。

相馬高校へ進学してからは、学業との両立に苦しみ、思う存分卓球に打ち込むことができないまま、高校時代が過ぎてしまった。

その後、保健体育の教員をめざし、福島大学に進学してからラケットを握ることになった。

上級生には、井上孝夫、佐々木十志春、大越 守、高橋敏夫、渡辺敏郎、同学年には村上長一郎、後輩には、中津川伸二、伊藤武志、大石隆俊、女子部には、日下 寛、猪瀬滋子、高野嘉子、佐藤孝子、半杭恭子などと共に卓球をとおして青春時代を謳歌した思い出がある。このメンバーとは、平成8年1月、実に卒業以来30数年ぶりに再会を果たし、その後、毎年小旅行を計画し旧交を温めている。

卒業後、小学校にも勤務していたこともあり、しばらく卓球から遠ざかっていたが、教師になってから、7年目にしてはじめて卓球部の顧問になった。

それまでは、校務分掌のうえで、陸上競技やサッカーなど部活動の顧問の引き受け手のない部の顧問を担当せざるを得なかった。それは体育主任として運動部全体の責任をもつ立場からである。

#### ◇中村第一中学校時代(昭和37年～昭和38年)

いわきの永井中学校から転任し、母校の卓球部の顧問になれたことが大変嬉しく、当時20代の私にとっては、放課後の練習が待ち遠しく、選手が体育館に入って来るのを首を長くして待っていた。一人ひとりの選手について、基本打球からシステム練習にいたるまでマンフォマン方式で練習の相手をした。帰宅して夕食をとったら、そのままダウン、教材研究は朝早く起きて授業の準備をするという日々が続いたのを記憶している。

当時の県中学卓球界では、好間中学が全盛で、「打倒好間中」が大きな目標であった。

卓球の監督としてのデビューは、第5回県中学校体育大会であった。

団体戦は、好間中学校と決勝を争ったが、残念ながら3対2の大接戦を展開し敗れた。

しかし、シングルスでは、横村眞一選手(カットマン)が団体戦の決勝戦で対戦し惜敗した好間中学のエース、佐藤 武選手を降し、団体戦の雪辱を果たしたことが今でも強く印象に残っている。

#### ◇相馬女子高校時代(昭和39年～昭和49年)

以前からずっと憧れていた高校の体育教師の夢を捨て切れず、当時厳しかった高校の教員採用試験に挑戦し、幸いその夢が得られた。28歳になってからである。

相馬女子高校に内定を受けたが、その条件の一つに部活動はバスケットボールの顧問を担当するということであった。

私としては、当然のことながら、自分の専門種目である卓球の指導をしたかったのであるが、体育教師の宿命であると受け止め、内定後の約3か月、相馬高校時代の恩師吉田道夫先生(現役の選手時代は神宮大会出場)に推薦していただいたバスケットボールの専門書を購入、理論と実技の研修に努めていた。

いよいよ4月1日に着任し、当時の体育主任であった持館松彦先生(バレーボールの名指導者)から、校務分掌等、今後の校務について指示を受けることになったのであるが、主任の口から意外なことが告げられたのである。

「部活動顧問の県であるが、先生には卓球部の顧問をお願いしたい。」というのである。理由は、「先生の専門性を生かすために考えた結論であり、このことは、卓球部の選手を大きく育てることに繋が

#### (中村一中卓球部時代)

前から二列目、向かって右端が森口先生、前列二人目が梅原、右端が西郷



ることを期待しているので、しっかり頑張ってもらいたい。」ということであった。

自分の好きな卓球が指導できることになった喜びで胸がいっぱいになり、その後の卓球の指導に情熱を燃やした。

実はこの部顧問の任命については、後になって同僚から耳打ちされたことであるが、3月の合宿練習中に、当時の卓球部員、種村繁子、目黒アイ子、菊地邦子、菊田キミ子（現：相馬卓球クラブ会長）が体育教官室に体育主任の持館先生に面会を求め、「新任の西郷先生を是非、卓球部顧問にしてほしい。」と訴えたということである。

持館主任は、その熱意に打たれ、バスケットボールの方は副顧問とし、卓球と兼務するというので、校長の承認を得た、といういきさつがあったそうである。

今、振り返ってみると、この4人の生徒との出会いが、相馬女子で10年間、選手の育成・指導に励む糸口ともなり心の支えになったと思っている。

私を相馬女子高校に採用してくださった校長は、豊田要三先生（東京帝大卒）である。

後に学務課長（現在の高等学校教育課長）を経て、磐城高校の校長（昭和46年、磐城高校が全国高校野球で、夏の甲子園を沸かし準決勝を飾った時の校長）になられた方である。

これも後になってから分かったことであるが、先生は、かつて双葉高校の卓球部の監督として、昭和24年・昭和25年の2年連続全国大会に出場し、いずれも準々決勝まで進出した経歴を持つ指導者であったのである。

私が高校卓球の指導者の一人として、その活動の舞台に立たせてもらい、ご指導を賜ったお陰で今日の自分があると今でも先生には深く感謝している次第である。

当時の相馬女子の練習場は、旧校舎時代の雨天体操場半分卓球台4台であった。校舎の老朽化に伴い改築が進められていたが、この雨天体操場は、「体育館一つで体育の授業に支障を来す」という理由で、移築補強して使用することになった。

移築間もない、昭和40年1月9日、県下に吹き荒れた強風のため、午前10時20分轟然たる音響と共に一瞬のうちに崩壊した。

この体育館で私は体育の授業（マット運動）を行っており、準備運動を終えたばかりであったが、体育館の雨どいが継ぎ目からすべてはずれて、一方向に向けており壁が波打っているように見えたので、危険を感じ生徒全員（55名）を新体育館に移動させた。避難後約10分後にこの体育館が黄色い土煙を上げて崩落したのである。（卓球台が4台とも潰れていた）

練習場を失い、途方に暮れていたところ、災害復旧で小体育館を建ててもらうことになった。完成したのは1年後であった。その間は旧校舎の空教室に卓球台2台を並べての練習を余儀なくされた。

相馬女子高校卓球部には初心者が多く、中学校での卓球経験があってもほとんどが無名の選手であったので、先ず2年生の新人大会に地区予選を通過させることに目標をおき、基本打球の指導に力を注いだ。その中で育ってきた忘れられない選手は、昭和42年（第13回）高校大会でダブルスに優勝した海東さみ・富谷明子である。高校に入学して初めてラケットを握った選手である。

決勝戦の相手は、磐城女子高校の長谷川・緑川組で、セットオールのジュース・アゲインを繰り返し大接戦の末、決まった瞬間の感動は今でも忘れられない思い出であり、また、あの時が私の高校卓球の指導者としてのデビューであった。

次の目標は、学校対抗に優勝することであった。中学校の無名選手や初心者を集めてのチャレンジである。

当時の県高校卓球界は磐城一高、磐城女子、成蹊女子、郡山女子、福島女子などが強く、中でも磐城一高（監督：山崎 勲 ※現校長）が群を抜いていた。

昭和39年に相馬女子の監督に就任してから、念願の学校対抗優勝は、昭和45年（第9回）県高校新人大会（福島女子と決勝）で、学校対抗の初優勝まで7年も経ってからである。

次の年の昭和46年、新装なった磐城一高体育館で開催された第17回高校大会では、宿敵磐城一高を決勝戦で破り高校大会初優勝、ダブルスも加藤幸子・天野和子組が優勝、さらに、高橋則子・斎藤

恵子が第3位に入賞し、ようやく相馬女子を県高校卓球界の頂点に立たせることができたのである。

この時の選手たち(上記4名の他、本内千恵子と大竹磨喜子)の喜びと感動の姿は今でも臉に焼き付いており、終生忘れられない思い出である。

その後の学校対抗戦では、善戦健闘及ばず、磐城一高には昭和47年(第18回)高校大会で決勝を争い敗れ、昭和48年(第19回)大会では準決勝で敗れるなど、磐城一高の山崎監督には優勝の夢を打ち砕かれ、何回も苦杯を味わったことが思い出される。

その後、昭和50年(第21回)大会では、相馬女子時代の最後の教え子である佐藤祐子(現在:根本<富久山クラブ>)浜名則子(現姓:浅野)、米山由美子(現姓:中和田)を中心としたメンバーが優勝を飾っている。

相馬女子の監督10年の中で、多くの選手を指導してきたが、上述以外の大会で活躍した主な選手には、昭和46年(第24回)県総体シングルス優勝の加藤幸子(平成11年:全日本軟式40歳の部で優勝<現姓:小林>)、昭和49年全日本県大会ジュニアシングルスに優勝(当時、北山中学校3年の須藤泰子選手と決勝を争った。)した石橋久美子(現姓:三谷)がいる。何れもカットマンである。

学校対抗では、昭和43年(第21回)県総体準優勝(磐城一高と決勝)、昭和45年(第23回)県総体準優勝(安積女子と決勝)の記録がある。

#### ◇原町高校時代(昭和49年~昭和52年)

相馬女子時代でも経験してきたが、原町高校に転任した年は、校舎の移転改築で旧校舎(小川町)から現在の校舎に移転が開始された年であった。田んぼの真ん中に建った新校舎には体育館がなく、卓球の練習場は空教室か、遠い小川町の旧校舎の体育館であった。新体育館は3年も経った後に、ようやく建てられたのである。

女子の新入生の中には、中学時代の優秀選手や素質のある選手が8名ほど入部してきた。相馬女子時代の初心者からの指導ではなく、即戦力となる選手も多かったので、練習場には恵まれなかったが、選手には恵まれたと思い、張り切って指導に打ち込んだ。

原町高校は男女共学のいわゆる「進学校」である。全員課外授業があるので、練習時間の確保がむずかしい状況にあった。卓球は時間をかけた反復練習が不可欠である。練習の質も大切であるが、量(時間)の確保も絶対条件である。

考えた末に、当時注目を集めていたスウェーデン製の卓球のロボットマシン(STEGA社)の購入を決断し、6月のボーナス(34万円)でこれを現金で購入するなどして選手の指導に情熱を燃やした。

やがて第1学期が終り、夏休みの合宿練習の計画を立てているところへ、「優秀な新人部員」が一人、二人と退部を申し出てきたのである。

第1学期の通知表は保護者との三者面談(進路相談等)のうへ、手渡しされることになっており、その際に学級担任から「大学への進学を希望しているならば、すぐに卓球をやめなさい。自分の経験からいうと、部活動と勉強は両立はできない。」との指導を受け、親からも部活動を続けることに反対されたことが、退部の理由である。

自分の経験や多くの例をあげたり、合理的な学習計画等を示して説得したが、その8人の優秀な新人部員が退部していったのである。落胆のあまりショックからは、しばらく立ち上がれなかったことが思い出される。

学級担任の多くは、高校時代に部活動の経験がなく、自分がやれないことは生徒もできないと思っているのであろうか。このような教育観や指導観は、果たして正しいものであろうかと、強い疑問を持ったが、その壁や流れには逆らえず苦悶したものである。

生徒たちは無限の可能性を秘めており、部活動には友人との「心の交わり」がある。部活動から得られる貴重な体験や感動が、その後の人生の窓を開くことになる、私は確信しているのであるが、人それぞれの価値観や人生観には様々な違いがあるのは当然のこととして割り切ることができればいいのであるが……。

この「優秀な8人の生徒」には、その後会ったこともなく、申し訳ないと思うが、顔も名前も思い出

せないのである。

原町高校時代、特に印象に残っている選手は、昭和50年度全日本県大会ジュニアシングルス準優勝（磐城高校の田子選手と決勝）した遠藤選手である。

その年の3月に全日本選手権大会に出場することになったが、当日は全国の交通ゼネストが展開され、すべての交通機関がストップしたので、当時は自動車の運転免許を取り立てであったが、自家用車に初心者マークをつけて二人の選手を東京まで引率したことが思い出に残っている。

#### ◇須賀川市教育委員会保健体育課時代（昭和53年～昭和54年）

派遣社会教育主事（スポーツ担当）として2年間、須賀川市教育委員会に出向（単身赴任）を命ぜられ、社会教育の普及振興の業務に携わった。

須賀川市では、新しい多くの友人との出会いがあり、また、本協会の平石家治（現：副会長）、伊東守信（現：顧問）、渡部信行（元：会計・監査）、須賀川市卓球協会の横山廣昭、薄井充良の各氏には仕事の面でも支えられ、大変心強くお世話になったことを今でも感謝している。

この時代は、仕事の合間を縫って時々卓球を楽しんだことと、郡山市で開催された全日本社会人大会の式典担当として、大会運営に携わったことが思い出にある。

#### ◇小高工業高校時代（昭和55年）

2年ぶりの現場復帰で、卓球の指導ができる喜びで張り切っていた時代である。

普通乗用車を9人乗りのワゴン車に変えて、選手を乗せて練習試合に出かけたものである。当時の選手で印象に残っている選手は、現在も現役の国体選手として活躍している原 晃選手である。卓球の選手として優れた素質に恵まれているほか、性格が素直で、意志が強く、何よりも集中力に優れた選手である。

ある日の練習で、全選手にツツキ打ちをバック・クロスに50本、ストレートに50本を命じていたが、途中緊急の打ち合せが入り、体育教官室に戻ったが、練習が気になって打ち合せの合間を縫って、時々体育教官室の小窓の隙間から選手の練習を観察していたところ、他の選手は与えられたノルマを果たせないまま、床に座ったり別な練習を始めたりしていたが、原選手だけは黙々と50本、100本の練習目標に向かって一心不乱に練習を続けていたことが印象に残っている。

後に「ふくしま国体」で本県の代表選手として活躍している姿を見たり、また、平成10年度東京選手権大会サーティの部で優勝するなど、選手として大きく成長したことに陰ながら喜んでいる。

一年間の指導であったが、原選手の指導をとおしていえることは、大きな選手に育てる最も重要なことは、「正しい卓球の技術」の徹底した基礎・基本の指導にあることは言うまでもない。

#### ◇相馬高校時代・前期（昭和56年～昭和57年）

教員となった以上、できれば一度は母校の教壇に立ちたいというのが多くの教員の望む思いである。

母校への転任は、46歳の時である。伝統ある母校相馬高校の卓球を復活させようと努力はしてきたが、校務分掌の上で、学級担任、加えて学年主任をはじめ、中堅の教員としての職責が重いため、思うような卓球の指導ができないまま2年間が過ぎ去った。

#### ◇県教育庁保健体育課時代（昭和58年～昭和61年）

福島県が、昭和70年（平成7年）に第50回国民体育大会を開催することが内定した時期に、保健体育課（現在のスポーツ健康課）で社会体育担当として仕事をする事になり（単身赴任2回目）高校卓球の現場から離れることになったが、三浦勝美会長（現：名誉会長）の指名理事として県協会に残り、外から県卓球協会の活動を支援してきた。

勤務して4年目の昭和60年6月、県立医科大学付属病院で胃潰瘍・食道潰瘍の外科手術を受け、6か月間、肉体的にも、精神的にも、挫折感を味わいながら苦しい闘病生活を余儀なくされた。

「重体説」が流れたこともあって、多くの先輩や友人、そして教え子が激励の見舞に駆けつけてくれたのであるが、そのほとんどが卓球をとおして出会いのあった方々であり「卓球で結ばれた絆」がいかに太く、深いものであるかをしみじみと感じ、病床に感謝の涙を流したことが終生忘れられない。

#### ◇相馬高校時代・後期（昭和62年～平成2年）

職場復帰を果たしたものの、激務に耐えられないだろうという、ご当局の「ご配慮」により母校の相馬高校に再び戻されたのである。

体力回復を図りながら、卓球の指導にも努めてきたが、校務が忙しく、毎日が激務で、仕事や会議・打合せの連続で、その日の仕事が終わった時には、卓球練習の講堂の電灯がすでに消えているという日が多かった。そんなことで、土曜日や日曜日に練習計画を立てて、指導を補おうとしても、選手のほとんどが消極的で、「伝統を誇る、相馬高校卓球の復活」の実現にはほど遠く、4年間が過ぎ、相馬高校を去ることとなった。

事実上、これが私の高校卓球の指導者としての最後である。

その後、白河第二高校の教頭を経て、三度目は母校相馬高校教頭として戻ってきたのではあるが、職責上、卓球の指導から離れ、平成7年「ふくしま国体」が終わった次の年に38年間の教職生活にピリオドを打ったのである。(高体連相双地区委員長：通算14年)

#### ◇県卓球協会を引き受けて(平成8年～現在)

定年退職までの残り少なくなった3月の中ごろ、当時、理事長であった平石家治氏(現：副会長)から突然電話があり、「三浦会長の後任を引き受けてくれないか」という打診があった。正直なところ、38年間の教職生活の疲れと「ふくしま国体」が終わった今、卓球界からも解放されて「自由の身」になりたかったので、返事をしなければと思いながらもなかなか引き受ける決心がつかず、退職の日が近付いてきたのである。

振り返ってみると、これまでの自分の人生の中で、とりわけ教職生活のほとんどが卓球との関わりで生きてきたその歩みの中には、卓球をとおして多くの人との出会いや感動があり、「私の人生の窓」を開いてくれたことを思い、これまでのつたない経験と私の残り少なくなった人生の僅かな時間を提供することが、卓球界のために少しでも役立つならば、こんな嬉しいことはないと考え、自分の力量を顧みず、思い切って会長を引き受けることになったのである。

「ふくしま国体」の開催を契機に高まった競技力の維持・向上、「生涯卓球」の普及推進など、テーマが山積しているが、今後とも、より良い人間関係を保ちながら、協会発展に微力を尽くしたいと考えている。

## 【付記】

### 手 記

#### 「第31回世界卓球選手権大会に学ぶ」

西 郷 徹 夫

今春、名古屋で開催された世界卓球選手権大会の審判員として、世界各国選手の姿を目のあたりに観る機会に恵まれた。技術面もさることながら、中国をはじめヨーロッパ各国選手の競技、マナーに深い感銘を受けた。

「さくら さくら」「荒城の月」など、日本の音楽をアレンジした軽快なマーチが流れる。第31回世界卓球選手権大会の華やかな開幕である。

各国選手団がプラカードに先導され、次々に目の前を行進していく。割れるような拍手がわき起こった。文化大革命の厳しい試練を経て後、6年振りに再び参加した中国の大選手団、戦火の下からやって来たカンボジア・ベトナムの選手団に対するさかんな拍手である。

白い小さなボールが跳びはねている会場は、友好ムードであふれている。

中国選手達は言う、「卓球を通して世界の人民と友好を深めるためにやってきた。」「一に友好、二に勝負」だと。

北京の打ち込んだ「ピンポン外交」が米中関係の改善に、そして、友情のラリーが世界平和に役立つとすれば、「軽薄」の代名詞として文字通り軽くて、薄いピンポンと跳びはねて、一つの場所に定着することのない小さなボールの使命は重大である。「政治がスポーツを動かし、スポーツが政治を動かす」スポーツと政治とは切り離すことのできない関係にあることをつくづく感じさせられた。

男子団体の決勝進出をかける日本対ユーゴ戦の主審台に立った時のことである。4対4でむかえた最終戦、カラカセビッチが対河野戦にみせたムキだしの闘志を主審台の上からみつめながら、深く考えさせられるものがあった。

私の再三にわたるシャウテング（ラリー中は声を出してはならない）の注意にも拘らず、流れる汗をふきとりもせず、大観衆の前でわめきながら仁王様のような真っ赤な顔をして奮闘している姿を見て、昔からの日本人が持っていた「大和魂」的なもの—現代はそれを失いつつあるようだが—を身につけていたからである。

スウェーデンの18歳のベントソンは激しく美しいラリーの応酬で、日本の伊藤を降し世界のチャンピオンになった。ゲームが終わると敗者の伊藤に走り寄りあいさつをした。しかも日本の現代っ子がとくに忘れていたような日本式の丁寧なお辞儀で……。

彼は一昨年の10月、日本に武者修行にきて萩村氏の厳しい指導のもとで4ヶ月間鍛えあげられた。畳の上で、日大部員とせんべい布団でザコ寝して、日本の卓球技術だけでなく、それを支えている「精神」を学んだという。

東京選手権に出場して、無名学生選手に簡単に敗れ去ったと聞いている。帰国後の1年半の間に彼は見違えるほど成長していた。

かつての日本の卓球は、強烈なドライブで、鉄壁のカットをほこるヨーロッパに挑戦し世界の王座についた。これに対して中国は、前陣速攻の布陣で毛語録を胸に日本からタイトルを奪った。

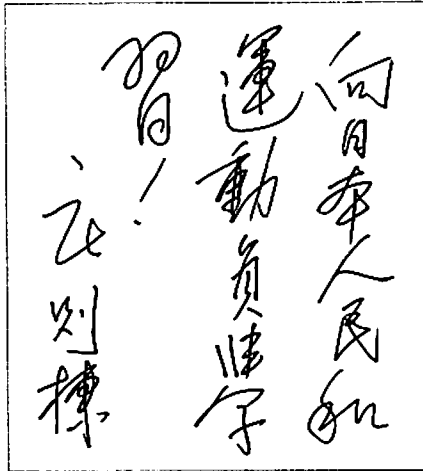
卓球競技の特徴は、人間対人間の対決である。したがって「心」と「技」が一体となった時、はじめてその真価が発揮されるものである。技術は精神に支えられたもので、「心の姿勢」があってはじめて向上するものであるとの確信を深めた。大選手といわれる人は、自分のプラスになることを数多く積み重ねていった「前向きの姿勢」を持った人であり、より困難なことに挑戦し続けた人なのだ。

男子決勝戦は、宿命の日中対決であった。私は興奮でふるえながら競技役員席の片すみでこの激突を見守った。予想通りの大激戦となった。

中国の優勝が決まった瞬間、ワッと日本側ベンチに全員が走り寄って握手を求めている。役員席からの私の祝福のことばに大きなゴツイ手をさしのべて握手を求めてきた選手。技術だけでなく、名実ともに世界の王者の姿を覗てさわやかだった。近くに中国のカメラマンがいた。中国友好の姿を沢山撮りたいと言っていた。荘則棟の「向日本人民和運動員学習！」のサインが私の机の上にある。日中友好関係が成立する日の遠くないことを期待しながら、ときおりながめては、これを心の糧として毎日の仕事に励んでいる。



31回世界大会（1971：名古屋）  
向かって右端が萩村伊智郎氏  
真ん中が西郷徹夫



書庫を整理していたら、数枚のサイン入りの色紙と一緒に古びた大きな封筒が出てきた。それには1971年（昭和46年）名古屋で開催された第31回世界選手権大会の審判員として参加した際の上記「手記」と各選手と交換したバッヂが10数個、それに当時の世界卓球を報じた関連の新聞記事が入っていた。今から28年も前のものである。

当時、記した「手記」を懐かしい思いで読み返しているうちに、拙文であるが、あの時の感動のシーンが糸をたぐるように次から次と蘇ってきた。

さらに、当時、展開された「米中ピンポン外交」の記事を見つけた。〈「友好第一、勝敗第二」の方針を掲げて参加した中国が、アメリカ卓球団を中国に招待すると発表〉という記事である。あれは、世界卓球の団体戦が終り、次の日が中休みという日、3月30日の出来事であったと鮮明に記憶している。

警護上の理由から、特別に設けられた大会関係者や中国選手団のための駐車場で、中国選手団を乗せたバスにヒッピースタイルのアメリカのコーワン選手が迷い込み、ステップに足を掛けたが、乗るバスが違うことに気がつき、あわてて立ち去ろうとした。この様子を見ていた中国選手がコーワン選手に手招きをして、バスの窓から顔を出し「われわれのバスに乗ってもいいよ」というジェスチャーをしたり、拍手をしたりして、歓迎の意を表す選手の様子と、コーワン選手を乗せた中国選手団のバスが通り過ぎてくのを隣のバスから、その様子を見ていたのである。

3月20日から始まった大会も、4月7日に終了した。私は、翌日帰途についた。途中、東京駅で購入した新聞にこの場面が写真入りで大きく報道されており、米チームが北京に招かれたことを知り心が躍った。

その後、4月10日に米チームが北京に到着、その舞台裏ではキッシンジャー米大統領補佐官が周恩来中国首相と会談し、ニクソン米大統領訪中の準備が進められ「ピンポン外交」が展開されていったのである。

その鮮やかな「ピンポン外交」に世界は衝撃を受けた。1971年（昭和47年）2月、アメリカのニクソン大統領が周恩来中国首相と会談、朝鮮戦争以来、22年間の敵対関係を解き、上海で、相互不可侵、平和共存など「平和5原則」を米中合同コミュニケで発表したと報じている。

アメリカは、中ソ関係の対立を利用し、「ピンポン外交」を展開して米中和解の布石をつくったのである。

当時の日本では、日中関係が何ら具体的な進展を見ない内に、突然アメリカによる「頭越し外交」が実現されたため、当時のマスコミは、中国敵視と政経分離を唱えてきた佐藤内閣の外交路線が痛烈な打撃をうけたとも報じていた。

私は、その「ピンポン外交」の端緒となった歴史的な場面を、その時、その場に居合わせ目撃した

のである。

以来、私はその後の米中関係には、ずっと強い関心を持ち続けているのである。

9月10日、NHK・BSの特集番組では、「修復なるか、米中関係の今後」が論じられていた。それによると、あの「ピンポン外交」以来、まだまだ解決しなければならない多くの課題が横たわっている。

大きくあげると、一つは、天安門事件（人権問題）、二つ目は深刻化している台湾問題（一つの中国）、今年になって起こった、コソボ・ユーゴ空爆の中国大使館誤爆事件の三つのトゲをどう取り除くかである。そして、我が国の中国に対する今後の外交は、アメリカ一辺倒ではなく、日・中・韓の対話の枠組みを広げ、環境・経済・日米安保・北朝鮮問題等に対してどう対応するかが課題であると報じている。

28年前のあの「ピンポン外交」がせっかく卓球が取り持つ縁でスタートした。平和外交が、その壁を乗り越えて花開く時を期待したい。21世紀は、もうそこまで来ている。

## あの頃の思い出

福島県卓球協会副会長 二木 康 視

私が本格的に卓球を始めたのは、福商に入学した年の夏休みが終わり2学期が始まった9月頃からです。靴材料卸を営んでおり、私が中学2年の時、父を亡くした為、学校の授業が終るとすぐ家業の手伝いをしなくてはならない為クラブ活動どころではなかったのですが、どうしても卓球をやりたくて、母に相談したところ、高校時代は二度とないからと、気持ちよく許してくれたので、勇んで卓球部の門をたたきました。入部してびっくりしたのは、たった5ヶ月なのに同級生との実力の差は歴然としており、梅津君、大宮君等は、県北予選を通過して、県大会に出場するまでになっており、皆生き生きと練習に励んでいたことでした。当時福島県の国体選手で先輩の戸田さん、大内明雄さんの二人が毎日の様に、我々のコーチに来てくれていました。私が3年生の年、先輩達が果たせなかった団体戦で優勝して全国大会に出場しようと大きな夢を抱いて、毎日毎日放課後、夜の9時頃まで猛練習を積み重ね、インターハイに望みました。県北予選では宿敵福高に勝って優勝、その余勢をかって郡山で行われた県大会に望んだが、準決勝で若商に敗れてしまった。決勝戦は若商対福高、接戦の末県北大会では我が校に敗れた福高が優勝、我々は眠れない一夜を過ごした。卒業後、家業を継ぐ為、東京に就職、東京でも仕事が終わると近所の卓球場で毎日練習を続けており、大東区の大会で個人優勝等の思いでもあります。

36年福島に帰って来て、家業を継ぎ、暇をみつければ福商に後輩のコーチに行くようになりました。福商卓球部がインターハイ県大会で優勝し全国大会に出場したのは、第18回大会（昭和40年）レギュラーは嶋原男・藤橋道夫・蓬田治雄・横山幸二で4人共練習熱心で、毎日毎日9時頃まで、そして日曜日は実業団の選手の胸を借り猛練習を重ねました。その成果が実を結び福商卓球部が、はじめてのインターハイ県大会団体優勝という偉業を成し遂げ、ダブルスでも嶋原・蓬田組が準優勝しました。昭和52年、保原高校で全国大会出場経験のある、伊藤武司先生が、転勤、1時間の早期練習、夜は9時までと厳しい心練習が始まりました。選手達も伊藤先生を信頼してついてきて、その年の喜多方で行われたインターハイ県大会での準決勝、磐城高校との試合は、最後までもつれ、延々と4時間もかかり4対3の小差で逃げきり、決勝戦は四連覇を狙う、絶対本命の喜多方工業高校を4対1の大差で圧倒し、12年ぶりの優勝を果たしました。メンバーは、村山一衛・寺島和雄・渡辺英雄・宍戸次男・斎藤達也・今野政寿・個人戦では、斎藤が3位・今野が6位・村山が16位と入賞しました。

26年間、福商卓球部のコーチとして振り返った時、特に印象に残る選手は、昭和37・38年県総体で連続優勝した菅野孝君、昭和43年全日本ジュニアの部県大会で優勝した甚野道雄君、彼は高校に入ってから初めてラケットを握り、1年半で県大会の栄冠に輝きました。現在もトーアエイヨーの監督として、又県北卓球協会理事長として活躍中です。

## 回想・雑感（60余年）

福島県卓球協会名誉会長 三浦勝美

### ◇中学時代～終戦

昭和10年（小学6年）頃、飯台（机）の上でボール遊びをしたのが、卓球とのかかわりのはじめとなりました。

中学時代（昭和11年～15年）には、日本が戦時体制に入り、卓球は軟弱なスポーツとみられ、肩身の狭い思いで、雨天体操場の片隅で、うす暗いハダカ電球の下で、毎日練習をしたものでした。（指導者も居らず、卓球台は1台）

当時の卓球部といえば、特に大会等もなく、同好会的活動でした。部の予算もなく、ボールは勿論のこと、ネット、サポートまで自己負担であり、そのような状況の下、練習をしていたのは、卓球が好きだったの一言につきるのかも知れません。

ラケットもペンの木べらしかなく、材質は桧、朴、桐、松等が主なものでした。ラケットは、当時の物価で1円、ボールが1ケ10銭位でした。（当時の中卒の初任給は30円位でした）

2年生のとき、福島高商（現福島大学経済学部）創立15周年記念卓球大会に出場し、早川選手（福島師範5年生・現福大教育学部、後の教授）と対戦し、5才年上の早川選手とはまるで問題にならず、大敗したことが、強い印象として今なお残っています。この大会出場が中学時代の最初にして最後の大会となりました。

当時の体育の授業は徒手体操、鉄棒、跳び箱等が中心であり、剣道か柔道が必修となっており、身体の鍛練が主な内容のものでした。球技等は次第に出来なくなった時代です。

昭和16年、大東亜戦争に突入、その後は、卓球も思うようには出来なくなり、大会等も開催されず、卓球界も停滞状態がしばらく続き、終戦を迎えることになりました。

### ◇戦後の学生時代（昭和21年～24年）

終戦後の日本の社会は、極度の物資不足の時代であり、卓球をするのにもボールがなく、1ヶ月1ダースしか協会からは配給されない状態でした。

練習といっても、大学の講堂の片隅で長椅子を片づけて、卓球台2台での練習でした。当時、斎地繁敏さん（全軟優勝、全日本硬式2位）が時折来られて、指導もしてくれました。中田鉄土さん（マ杯優勝、魔球中田といわれたペンのカットマン）にも何かと指導を受けたものでした。

昭和22年、学連結成の動きが高まり、関東学連、関西学連に次いで、全国で三番目に、東北学生卓球連盟の設立をみるにいたりしました。学連設立の準備段階において、東京に出かけ、日本学生卓球連盟幹事長（早大）の蒲田さんから規約や運営等について指導、アドバイスを受けての設立でした。その時昼、夕食用として持参したおにぎりが東京の人にとっては何よりの「おみやげ」として珍重されました。当時の食糧事情が如何にひどかった事がうかがえるでしょう。

学連設立を記念して、同年第1回東北学生卓球選手権大会が仙台市（東北大学講堂）で開催されました。依然としてボールの入手事情が悪かったので、学連として、メーカー側と接渉し、全面的な協力を得て、東北各県の大学と宮城県下の高校に3ダース位ずつ配給の労をとり、喜ばれたものでした。特に現在はありませんが有楽町のガード下のA.J.P.A.のメーカーの方には本当にお世話になりました。

当時は振りかえると、物資、食糧が極度に不足していた学生時代が苦しくもあり、また、なつかしく思い出されます。50年前のことです。

### ◇福島県に戻って

昭和24年、福島県に戻り、県総体（会場は福島一小の講堂）のとき、いきなり、審判長をやってくれといわれ、とまどった次第です。最初から、県卓連と高体連の役員として、二足のワラジを履いた格好で県卓球界とかかわりを持つようになり、今日にいたっております。

## ◇大会での思い出

- (1) 昭和22年、東北高校卓球大会と東北卓連総会が鶴岡（山形）で開催されました。

東北学連加盟の大学生の県登録料免除要請のため、総会に出席させていただき、また大会も観戦いたしました。どういう訳か決勝の審判をやることとなり、対戦相手は、宮本選手（青森・当時としては珍しいシェークのカットマン）と角田啓輔選手（宮城・古川高）の二人です。角田選手のサービスを宮本選手がネットインと思ったのでしょう、返球をしなかったのですが、私の右手は、すでにセーフのジェスチャーをしており、判定通りとなりました。当時の青森は卓球王国として天下にその名を馳せていた時代で、監督、役員も錚々たる人達でしたが、抗議もなく、事なきを得ました。

判定のタイミングが大切であることを痛感しました。（角田選手は中大に進み、元アジアチャンピオンです。）

- (2) 昭和30年の兵庫国体のときのことです。

高校女子は京都（華頂女子高が主力）が優勝候補でしたので、報道陣の取材、カメラのフラッシュを浴びている姿を眼のあたり見て、うらやしくもあり、また、なにくその闘争心にも燃えていました。この京都と3回戦で対戦、3時間余の大熱戦の末京都を破り、ウップンをはらしたことが今なお記憶を新たにしております。準々決勝では、昼食をとる暇もなく、3時頃、愛知との対戦となり、敗れましたが、思い出深い一戦でした。

団体戦では、チームのメンバー全員の勝利への可能性を求めての闘争心と集中力が、実力以上の結果をもたらした好例でもあると思います。当時のメンバーは、平山恭子（福女）新田千恵子（喜女）吉田登美子（喜女）奥山厚子（成蹊女）の皆さんでした。

- (3) 昭和40年の全国高校卓球大会（長崎）のときのことです。

渡辺二郎（安達高）が参加することになり、乗車券の手配が遅れ、急行寝台の予約席がとれませんでした。郡女の宇賀神先生と同行したいので、東京駅で、助役さんをお願いして、座席のとれない寝台車に乗りました。午後4時の頃です。日中は3人掛けをしてくれましたのでよかったです。7時になると座席が寝台となり、2人で通路の丸椅子に座ることになりました。渡辺君は、通路に新聞紙を敷いて寝ましたが、私はそうもいかず、一晩中（朝の7時まで）尻の置き場もなく過ごし、10時間がいかに辛かったか、今思うとぞっとする位です。降りるとき、車掌さんが、20年間勤務しているが、こんなお客さんに出会ったことはありませんと笑顔で降ろしてくれました。長崎駅に着いたのは12時頃で、延々20時間の列車の旅でした。

一方、大橋先生（平工）の一行は、夜行列車で乗客も少なく、のんびり、悠々と寝そべて長崎に来られたとのことでした。

- (4) 昭和45年の県高校卓球大会のときのことです。

当時、女子では、郡山女子高、磐城女子高、平商高、安達高がせり合っていた時代です。決勝は郡女と安達の対戦となりました。新人戦では安達が3-0で郡女に勝たせて貰いましたが、内容的には大接戦の末の勝利でした。本番でのオーダーは、何度も書き直し、頭を痛めた結果の末提出したものでした。宇賀神先生も同じ思いだったと思います。

新人戦に敗れ、雪辱に燃える郡女の宇賀神先生と選手達の勝利への執念と意気込みはものすごく、佐藤（ふ）選手が、新人戦で負けた遠藤選手に、また熊谷選手（カット）に共にセットオールで勝ち二勝して2対2となり、5番は、カットの渡辺選手と左、表ペンの青山選手との対戦となり、途中促進ルールが適用され、攻撃にまさる青山選手が勝ち、郡女は念願の優勝を果たした次第です。

平成10年8月、当時のチームのメンバー全員（7人）が30年振りに顔を合わせ、岳温泉のホテルで、当時の思い出話を花を咲かせ、夜を徹して青春時代の苦しかったこと、楽しかったことなど語り合い、思い出深い一夜となりました。誰がつけたのか、部屋のドアには、「三浦先生を囲む美女軍団」と書いてありました。

当時の新人大会、高校大会の決勝の戦績は次の通りです。

〈新人大会〉

安達	3-0	郡女
1. 熊谷 (C)	2 $\left( \begin{array}{l} 21-19 \\ 21-11 \end{array} \right)$	0 石井
2. 遠藤	2 $\left( \begin{array}{l} 12-21 \\ 21-19 \\ 21-16 \end{array} \right)$	1 佐藤(ふ) (C)
3. 遠藤 見玉	2 $\left( \begin{array}{l} 19-21 \\ 21-15 \\ 21-15 \end{array} \right)$	1 根本 青山(表)々
4. 見玉	————	青山
5. 渡辺	————	石井

〈高校大会〉

安達	2-3	郡女
1. 遠藤	1 $\left( \begin{array}{l} 17-21 \\ 21-19 \\ 18-21 \end{array} \right)$	2 佐藤
2. 熊谷	2 $\left( \begin{array}{l} 21-15 \\ 21-19 \end{array} \right)$	0 石井
3. 遠藤 見玉	2 $\left( \begin{array}{l} 19-21 \\ 21-1 \\ 21-15 \end{array} \right)$	1 石井 青山
4. 熊谷	1 $\left( \begin{array}{l} 14-21 \\ 21-16 \\ 15-21 \end{array} \right)$	2 佐藤
5. 渡辺	1 $\left( \begin{array}{l} 11-21 \\ 21-17 \\ 11-21 \end{array} \right)$	2 青山

◇協会の役員としての30年

(1) 県高体連卓球部委員長時代

昭和30年、いつの間にか委員長になっていました。初代の委員長ということです。まず、年度はじめの仕事として、大会の日程、要項の作成、支部との連絡等、無我夢中で過ごし、なんとか大会開催に消ぎつきました。全く多難の時代でした。

当時、会津地区には、委員長として、後に教育長になられた佐藤昌志先生(会工)が活躍されていました。

翌31年、宇賀神先生(郡女)が県の委員長になられました。諸連絡と引き継ぎのため郡山に行き、駅で初対面の挨拶となりました。それ以後、宇賀神先生とは40年余のお付き合いをすることになりました。

(2) 理事長時代(昭和50年~昭和54年)

宇賀神先生や松崎先生から、全面的に協力するから理事長をやれとの強い勧めもあり、理事長をひき受けることになりました。事務局長に松崎俊一先生、会計に菅野源吉先生のコンビが誕生し、組織、運営、会計等の面で、大きな変革とともに、卓連の活動が新しい段階に入り、活性化が見られるようになりました。

(3) 会長時代（昭和59年～平成7年）

昭和59年4月、多くの方々のご支援の下、会長をお引受けすることになり、「ふくしま国体」に向け、第一歩を踏み出すことになりました。

また、その年、高校卓球界に夢と希望達成への一助ともなればとの願いから、優勝旗を寄贈する運びとなりました。その後、大橋征先生も新人大会に優勝旗を寄贈されております。

昭和60年からの10年間は「ふくしま国体」優勝に向けての選手の育成と競技向上のため、どのように取り組むかが大きな課題であったと思います。

卓球関係者・役員・監督・コーチ・選手が一丸となり、可能性の実現と目標達成への絶ゆまざる努力の成果が総合第2位というすばらしい成績を生み出したものと思います。「ふくしま国体」に向かって、長い間、ご支援、ご協力いただいた多くの方々に対して、敬意と感謝を申し上げる次第です。

◇卓球場設立について

第二の人生をどう過ごすかについては、退職2年前程からいろいろ考えておりましたが、これを決定づけたのは、自分は戦争で、(海防艦乗組員として)何度も死んだ人間ではないのかということでした。若き青春時代を謳歌することなく戦場で散った多くの仲間達のことを思うと、おめおめと生き長らえては申し訳ない、お世話になってる社会に対して、何かをしなければならないという念にかられておりました。自分に出来ることは、50年間かかわってきた卓球関係のことしかないとの思いが、昭和59年11月の卓球場の設立となりました。設立の趣旨は、卓球の普及と底辺の拡大ということですが、10年後には、「ふくしま国体」がやってくる、10年かければ、全国で活躍できる選手も育つだろうとの願いもありました。

最近、各地区の熱心な指導者の努力の成果がみのり、全国でも通用する選手が現れてきていることを思うと、生きがいを感じるこの頃となりました。